

玉多須伎二之卷

伊吹迺屋先生講本

人門

武藏國 北村久備

上野國 田中貞幹

信濃國 鈴木敬貞

校同

根岸信輔氏寄贈

發題下



挂卷カケマキも可畏カヒコば天照皇大御神高天原アマテラスノオホミカミノタカヒラ小坐こまくて皇孫スメミマ邇ニと藝ゲ
 命ミコト小八尺鏡コヤチカガミ天蓑雲劔アメノムラサキモノノタチ八尺勾瓏ヤチカケタマよの三種ミユキ比神器ヒカミタカラを投げ奉
 じ給たまひ此御鏡コカガミを吾アぐ御魂ミタマと志こて齋イハヒき奉り給たまはる寶祚アモリヒコの
 御隆ミサカヒを天壤アメノツチと與とも小窳コヤハみ無ナるほしぞ詔ミコトノコトひて皇美麻命スメミマノミコトを筑
 紫シの日向ヒノカの高千穂峯タカチホノミネ小天降アメノタし奉たまじ給たまはるは小其御子コノミコ



此次く神器を御傳子坐て。大御神の詔比如く。天下統御し
給子依た尊しとも尊き御事小ぞ有ける。此三種の神宝も
世まで大宮中より齋き奉らせ給へるが其を畏み思ひて。新
小御鏡を造らせ給ひ勾玉と共に初め如く天日野の御
守りと成り坐て。堅石小常石よ。今に至るまで御傳ませ
其本の御鏡も。伊勢大御神御鏡も。尾張國熱田宮の神林と
齋き祭ら。然る小天照大御神よ。四十八世の皇孫後鳥羽
天皇の御宇小當りて。源頼朝卿と云人出て。平家の一族を
滅し。其功績よ依て。摠追捕使と云依職を乞奏しける小。後
小朝廷の御惱みぞ成るは。是は知食さば。其を勅許あり
けまば。頼朝卿やがて。幕府を相摸。國鎌倉小開きあるが。其
私の臣小。北條氏てふ者出来て。甚く朝廷を惱ませ奉り。畏

くも天皇命を遠き島々小移し奉り。甚く逆威を振るよ
。足利氏小移りて猶甚しく。皇統を二流小分れ坐し。天下
亂れよ亂れて。其果をばと自然小。皇統も御一流小成坐し。
織田豊臣の二公小次て。東照神御祖命。世よ出坐し。其亂逆
を鎮め。宸襟を休免奉り給ひしうば。天下を古小も例あき
はで小治りまは。最も尊き御事小おも有る依。諸おらく中
世に亂れと。其根本を按るよ。枉神の荒びを元よ。お
れど。最も畏き。崇徳天皇比大御怒りよ。發れる小や。ぞ所
思。由あり。其説あり。小書き。尽さば。くも非ざれ。抑北條
が代。く此逆罪ありし小比。ばてハ。泰時が善意善行ありて。

父を諫し事は初巻小論了れど。猶かの明慧傳を按ざる。泰時を父命背き難く。力及ぶと上洛せしむ。八幡宮の前なる。赤橋北本おして。馬より下り。首を低て信心小祈り申て云く。此度の上洛理小背けり。忽小泰時が命を召れて。後世をば助け給ふは。冥慮定めて照覽あらむ。聊も私を存せむ。もし天下の助と成て。人民を安むは。哀憐を垂給へ。と申し。はと三嶋明神の御前小て。誓を立とするも同じ。と見え。泰時明慧房を渡り。信仰して。其教訓を授ける。小法師の物。悉く国王の物。非と云。事おし。然れど。天下小孕れて。義を存せむ者。よし命を奪ひ給ふとも。辞むこと有む。やはを背くは。我朝の外小出て。天竺。且小も渡るべし。然るを私小武威を振ひて。官軍を亡し。刺し。太上天皇を樹小

して。遠國小移し奉り。皇子后宮月御雲客を。開く。小流せる事。その理小背けり。冥の照覽。天の咎め無らむ。や。小縁の徳を以て。其災を贖ふべうら。並く。此益を以て。此罪を消せ。事有。徳うらす。御様を見る。小是。布どの理小背く事。お給ふべき事。小ハ非ぬ。何小と問ふ。泰時お不れ。落る涙を。けらぬ。寐ふて。押拭ひて。疊紙を取出し。鼻かみ。杯して。押静めて。此事。右の事どもを語り。誠小其罪免れ難し。今の仰を承。きとて。右の事どもを語り。誠小其罪免れ難し。今の仰を承。りて。感涙さら。小禁じ難し。と云。由見。元とゆ。明慧とハ。梅尾寺。小住し。高辨と云。し。僧小て。高倉院の瀧口。平重國と云。る人の子あり。此難問。まこと。の道理。了叶ひて。少くも。然れ。聞然。もる事あり。此法師の事。お下小も云。を見。べし。然れば。其運命を天小任せて。怖く。あがら。父の命せし如く。事行。牙。依。小。思ひの外。小。身。難。才。無。り。し。う。せ。其。後。形。布。も。戦。く。慄。く。と。恐。れ。思。ひ。て。其。惡。罪。を。贖。む。と。其。行。ひ。を。慎。み。神。小。あ。う。誓。申。し。て。出。と。り。し。由。お。了。比。北。越。よ。く。叶。ひ。て。其。信。

心ある心底を
見るみ足れり。けれど。元よア文盲不學ブガクの人ありしかば。父
の命ありとも。天皇ニ詔ミコトノコトは替カ子難ガタシしてふ。重オモシき大義ダイギを知
らざ。依ヨ故コ。斯カる善心ゼンシンハ有アル。あぐら。最トモも恐オソき大逆ダイギャクを犯トせる
あア。依ヨと泰時タイジ。於オ人ニ語コトりて。不肖フセウ愚昧ウマイの我ガ。あぐら。政
を官ツカサて。天下テンカを治シむる事コト。一筋イツジンは明慧メイスイ上人ジョウジンの御恩ミコトノチカラを
りと言イひ。承久ジョウキウ大乱ダイランの後ノチ。在京ニせる時トキ。乃スな法師ホウシ。天下テンカを
治シむる術マカを尋ヒて。國クニを治シむる事コト。良医リョウイ此病ココロノヤミを治シむる。病
根ネの發ハる所トコロ。よく診シて。治シむる如ごとく。國クニの乱ミダる。根元ネノもとをよ
く察サて。其ソノ根源ネノもとを治シめ。まと無欲ムヨク。あとて。天下テンカを治シむべし。と
言イふ。教訓キョウコンを受ケて。其ソノ戒心ケイシン。肝カは銘シじて。漢カンく大願ダイガンを發ハし。此コノ人
心中ココロノナカ。普ツひて。此コノ趣ソツを守モる。と語コトれる由よし。あるせり。此人コノヒト
父チチ。北遺領キタノノリ。名ナも。己ミ。少オウ。志シ。く取トルて。諸弟等シヨテトウ。ふ多く分ワち與ヨ。子コと
依ヨ。無欲ムヨクの爲ため。さは。を始ハめ。一イツ世セ。北善行キタノヨウギョウを。數多アツクのせせ。り。右ミダの
も。は。甚オモシく文フミを約ツめて。記シせ。れ。ぞ。奉ホウ。く。ハ。本書ホンショを見ミる。處トコロ。し。此コノ法ホウ
慧スイ。グ。教訓キョウコンせる語コトども。凡オソクて。佛法ブツポフ。興キヨウ。う。ら。甚オモシく。感カン。と。し。此コノ法ホウ

師の言コト。今イマの知識チシキ。と。ちの申ウ。さ。依ヨ。佛法ブツポフ。グ。實マコトの佛法ブツポフ。よて
侍シ。ら。ぞ。世セ。中ナカ。佛ブツ。法ポフ。不フ。ど。惡アク。ま。物モノ。を。侍シ。ら。じ。と。も。云イ。ふ。り。法ホウ。師シ
も。も。希ス。ふ。ハ。か。く。正マサ。し。き。人ヒト。も。有アル。ら。ず。其ソノ。旧キウ。く。高僧カウソウ。智識チシキ。と
聞ク。え。し。僧ソウ。ども。一イツ。人ヒト。も。漏ル。ま。じ。天狗道テンクドウ。入イ。と。る。グ。中ナカ。不フ。此コノ。明
慧スイ。と。解トク。脱ダツ。せ。の。み。其ソノ。道ミチ。は。墮オ。せ。ま。と。其ソノ。界カイ。ある。魅ミ。の。人ヒト。は。た。き
て。語コト。れる。ま。と。何ナニ。く。れ。の。書シヤク。は。見ミ。え。と。る。を。前マエ。不フ。い。と。心ココロ。得エ
の。と。く。思オモ。へ。り。し。を。右ミダ。不フ。擊ツ。と。る。泰時タイジ。へ。の。難問ナンモン。ま。と。天下テンカ。を
治シ。む。る。道ミチ。の。教訓キョウコン。あ。不フ。本書ホンショ。不フ。泰時タイジ。が。信シン。仰オウ。の。餘ヨリ。は。辨ハ。尾ビ。寺ジ
子コ。所トコロ。領リョウ。を。寄ヨ。進シン。あ。る。不フ。辞退ジタイ。せる。時トキ。の。言コト。あ。ど。を。思オモ。ふ。不フ。實マコト
小コ。も。天狗界テンクカイ。の。物モノ。北キタ。云イ。ふ。如ごとく。此コノ。僧ソウ。む。う。り。は。彼カノ。界カイ。入イ。ま。じ
ま。人ヒト。と。ぞ。所トコロ。思オモ。ふ。猶なほ。此コノ。事コト。ハ。季キ。然シカ。れ。ぞ。泰時タイジ。が。善行ゼンギョウ。を。力チカラ。免メ
く。古コ。今イマ。妖魅ヤウミ。考カウ。不フ。論ロン。ふ。を見ミ。べ。し。然シカ。れ。ぞ。泰時タイジ。が。善行ゼンギョウ。を。力チカラ。免メ
志シ。は。實マコト。不フ。世セ。戕欺シヤウキ。ける。不フ。非ヒ。ま。父チチ。の。命イノチ。不フ。順ジュン。へ。依ヨ。前マエ。非ヒ。を。悔クハ
て。其ソノ。逆罪ギャクザイ。を。贖シユク。む。む。の。所トコロ。爲ナ。あ。す。け。り。然シカ。る。不フ。泰時タイジ。が。孫マコ。の
の。如ごとく。云イ。ふ。る。物モノ。も。あれ。ど。此コノ。不フ。最トモ。く。愚ウ。き。男オトコ。あり。き。其ソノ。不フ。善人ゼンジン
井君イミツノミコ。美ミ。ゆ。し。の。讀史餘論ドクシヨロ。ま。と。師シ。の。王オウ。が。お。ま。ま。不フ。論ロン。ひ。置オケ。れ
と。る。を。見ミ。て。斯カ。て。弘安四年正月ワカサネヨシツキ。不フ。蒙古襲來モウコウシヤクライ。の。事コト。あ。す。此コノ。と
知チ。依ヨ。べ。し。

き時宗執權不て。前小云る如く。奸悪ある男ふは有しうぞ。
此事小於ては能く計らひてぞ有る。此を師の馭我慨言
小。季曲よ記し置れととは。今更不云を交。かつ其賊北軍船
を。神軍の神風よて。吹きく折し。懸ふしとる。趣おど。令世の
書等よ。季く見元とるを。橋保己一檢校。拾ひ抄さしめて。
螢燭抄と号けし物の有るを見るは。此時の事也。かの國
籍ふも。舌を巻て恐れ記し。西洋よて皇國北事を云牙る。ギ
ハムヤツバムと云ふ物を訳して。鎮國論と名。けりて持明院
殿北御流ふ。花園院の御次小。後醍醐天皇立せ給牙。此
は龜山院の御孫。後宇多院の皇子。後二條院北御弟小坐ふ
也。二十二歳よて。御世治看せり。是とき鎌倉は。高時入道執
權あ。了。驕奢を恣ふ。朝廷を蔑如し奉。殊小逆威

を振牙。依を。天皇元よ。英哲北御性小坐於れ。渠を滅不
と。後鳥羽院の舊き御恨を晴し。公家の政小復し給はむ
と。御世初米北頃より。内くそ北御催しぞ有け。後増鏡
岐國へ。近されけせ給ひし時の。御意む牙を云る所。昔の
御迹を。其と計りのある。ちぶ無く。人の住家も稀小。自づ
うら。養の塩やく里ばう。ゆ。遠よて。最哀れるを御覽する。ふ
も。御身乃上を指置れて。先かの古北事お不し出。か。所
よ。世字過し給ひけむ。御心の内。い。計。お。り。け。む。と。哀。ふ。思
く。覺。さ。る。小。も。今。と。更。み。か。く。近。ひ。終。る。も。何。よ。思
ひ。立。し。事。ぞ。か。の。御。心。の。末。や。果。し。遂。と。思。ひ。し。故。あ。り。昔
の。下。ふ。も。哀。と。覺。さ。る。う。む。う。し。せ。書。集。め。尽。せ。さ。む。と。有
る。昔。北。御。迹。を。は。後。鳥。羽。院。の。御。坐。せ。る。御。迹。を。い。ひ。彼。古。の
事。と。ハ。彼。院。の。當。昔。を。い。ひ。彼。御。心。と。は。彼。院。の。御。心。を。申。せ
る。れ。也。是。ふ。て。も。後。鳥。羽。院。北。旧。お。し。御。恨。を。然。る。不。正。中。元
晴し給む。むの御心お。し。こ。や。著。明。あり。然る不正中元
年九月ふ其事泄あり。高時甚く怒りて兵を遣し。密詔を蒙

れる。土岐頼員。多治見國長らに殺し。中納言資朝卿。藏人頭
俊基朝臣を鎌倉子捕へ下して。事由を問ふ。服せ。此、二
卿等々。天皇北近臣。二人共。身を修験者。おと不疑ひ
おして。關西關東の風俗。要書。おとを察し。土岐多治見。おと
も。此、卿とち。花語。うハれし。れり。彼、承久の時。の。哥聖。とち。此
倫。あら。君と。憂ひ。を。共。よ。して。事。を。謀。れ。る。忠。臣。お。ち。れ。り。
爰。お。天皇。お。ば。し。此。獻。謀。お。勅。使。を。遣。して。高。時。よ。告。文。を。賜
ひ。謝。し。給。ひ。志。お。依。て。俊。基。朝。臣。を。都。お。歸。し。資。朝。卿。を。ば。佐
渡。國。お。遠。流。して。一。は。於。事。靜。り。て。ぞ。有。け。依。讀。史。餘。論。よ。高
清。盛。入。道。よ。誓。詞。を。賜。へ。る。よ。し。云。傳。ふ。是。も。入。道。逆。賊。を。恐
お。して。強。申。と。る。れ。り。其。後。淺。原。房。賴。が。事。の。時。よ。龜。山。後。宇
多。北。兩。上。皇。よ。り。關。東。よ。告。文。を。賜。ひ。し。ハ。世。の。浮。説。を。仰。せ
開。け。れ。む。為。お。万。乘。の。舟。を。屈。して。陪。臣。よ。對。ひ。て。誓。は。せ。給
ふ。是。よ。於。て。皇。威。地。お。落。と。り。此。と。尤。後。醍。醐。帝。ま。と。告。文。を
下。され。し。事。を。お。ば。ら。く。關。東。の。疑。ひ。を。解。お。た。て。御。指。意。を

晴さむ。為の獻謀。よ。出。給。と。云。万。嘉。曆。元。年。七。月。お。量。仁。親。王
ども。帝。德。比。御。累。と。ぞ。申。以。べ。ま。を。皇。太。子。お。立。給。ふ。此。を。持。明。院。殿。の。御。流。お。て。後。伏。見。院。院。院
皇子。あり。後。醍。醐。天。皇。お。御。子。多。く。在。し。う。ど。例。の。如。く。北。條
計。ひ。み。任。せ。給。り。と。増。鏡。斯。て。彼。獻。慮。お。止。ま。を。無。く。禁
太平。記。お。ど。お。見。え。と。也。裡。り。て。密。よ。諸。僧。よ。命。じて。東。夷。を。調。伏。せ。し。久。元。德。二。年。北
三。月。お。東。大。寺。興。福。寺。延。曆。寺。れ。ど。お。行。幸。あり。其。は。第。三。の
皇子。の。延。曆。寺。北。座。主。お。て。大。塔。宮。と。申。せ。依。と。密。よ。謀。り。給
ひ。其。僧。徒。ら。を。語。ら。ひ。て。東。夷。を。討。む。事。を。議。お。給。ふ。ぞ。有
け。依。主。憂。ひ。臣。等。を。先。ら。れ。て。天。下。更。よ。安。き。時。あ。き。よ。何。事。の
獻。願。お。ら。む。と。尋。ぬ。れ。む。近。年。相。摸。入。道。が。行。迹。日。頃。の。不。義
よ。超。過。せ。り。蠻。夷。の。輩。は。武。命。よ。從。ふ。者。お。れ。む。召。と。も。勅。お

應がばうらむ。只山門南都の大衆を語ひて、東夷を征伐せ
られむ御謀とぞ聞えし。是に依りて大塔の二品親王を、時の
貫主もて在せしう。今も今も行學とも不棄果させ給ひて、
朝暮あが武勇の御嗜みの外に他事あし。御好ある故にや
因らむ。早わざ。江都グ勤捷も超され。七尺の屏風も
高しとせ。打物ハ子房グ兵法を得給へば。一卷此秘書。盡
され。夢を云ふとれし。天台座主始りて。義真和尚より。以
ひ合。多るよこそ。東夷征伐の爲。御身を習え。生む。後。思
ける。武藝の道とは知られぬ。と有る。おて。知べし。然。依。ふ。
其事い。おし。う。鎌倉。小。洩。聞。え。し。う。ば。相。摸。入。道。大。く。忿。り。て。
此君御在位。此程也。天下静まはまじ。承久此例。不任せて。違
國子遷し奉る。法し。先。殊。も。龍。顔。小。尺。尺。して。當。家。を。調。伏。あ
と。依。僧。等。を。搦。め。捕。り。て。仔。細。を。尋。ね。む。と。兩。使。を。上。洛。せ。し
免て。忠圓僧正。文觀僧正。圓觀上人。と云ふ三人。或。六波羅。子

捕子免。六波羅と。京師守護の所。鎌倉と。其より鎌倉
置く所。此役所の名あり。其より鎌倉
小下して。ま。於。文。觀。僧。正。忠。圓。僧。正。を。拷。問。せ。る。ふ。二。人。共。ふ
白。狀。ふ。及。び。乃。依。中。ふ。も。忠。圓。房。は。責。さ。る。先。よ。主。上。山。門。を
御。語。ら。ひ。有。し。あ。と。大。塔。宮。此。御。事。ま。と。俊。基。資。朝。の。隱。謀。か
ぞ。有。す。も。有。ら。ぬ。事。ま。て。残。あ。く。白。狀。一。卷。よ。載。さ。り。此。僧
此。時。に。於。遠。國。へ。流。さ。れ。け。る。が。北。條。亡。び。て。後。ふ。み。お。召。歸
され。て。皇。の。寵。遇。を。蒙。き。る。中。ふ。も。文。觀。が。著。後。を。殊。も。甚。し
かり。其。太。平。記。の。文。觀。僧。正。著。後。事。と。あ。る。條。を。見。て。知
法。し。此。僧。ど。も。北。條。調。伏。の。法。を。行。ひ。て。其。驗。あ。く。朝。敵。の。拷
問。字。う。け。て。忽。ち。君。此。法。依。御。大。事。を。白。狀。せ。り。然。る。實。あ。き
法。師。ら。た。歸。洛。の。後。を。圓。頭。を。も。列。ら。る。法。き。よ。召。歸。して。寵
遇。他。小。異。あ。り。し。は。何。事。ぞ。や。是。に。就。て。思。ふ。承。久。の。時。よ。
加。の。梅。尾。寺。の。明。慧。房。官。軍。の。落。人。を。隱。し。て。出。さ。し。り。し。う
ぞ。泰。時。が。手。小。搦。捕。ら。れ。て。其。事。を。問。は。る。ふ。敵。を。免。る。し
軍。士。の。疲。れ。て。隠。れ。居。る。を。我。が。身。難。ま。あ。ら。む。と。て。情。あ。く

追出して、敵の爲に身命を奪われむ事を省みぬ事や侍、べき。隠を事あらば、袖の中、袈裟の下にも隠して、取せばやと存じ侍。これ政事の爲あらまひ、愚僧が首を刎らるべし。云、あると、彼、明慧傳に見えたるは、誠は殊勝ある法師ありけり。泰時が此僧を信仰せし、儲か北俊基朝臣は、先年捕はれて、鎌倉まで下り給ふれど、様にお陳じ申されし趣、實もとる赦されて、京に歸り給ふるが、今度の白状、共にお隠謀の企もはら彼朝臣より有り。や載と依故よ。はと捕はきて、鎌倉に送られ。蜘蛛手厳しく結とる一間にお押籠られ給ひけり。此朝臣のち遂に北條が爲に殺され給ふは、て當今御隠謀のまや。露正。そは下にお云ふを見る所し。顯のち。御位を持明院殿に進らむを。近習れ人々青女房にお至依まで悦合るふ。土岐が討れし時も其議おく。今まこ

俊基捕はれと成ぬれど、御位の事お就てハ。何お依議有とも聞え祿む。其御方此人。按お相違して力を落せり。爰お持明院殿より。内々關東に御使を下さされ。當今御隠謀此企事までお急お。武家速よ。弘明の沙汰おくは。天下の亂。近きお有。法しを仰られけり。此、時持明院殿にお。後伏見花園に。量仁親王あり。是ももて持明院殿の御流と。大覺寺殿の御流と。互にお御中宜らざりし事を知る所し。此、おかの北條、時宗が。後嵯峨院の遺勅と稱して。後漢草院と。龜山院と。御兄弟此御末かたる。御即位有べしを。詐り定め申せる故あり。甚おくき奴おてぞ有。なる。此、お後よ。足利高氏が。持明院殿にお。其、院宣を賜はする事を。思ひ合は。相摸入道實もを駭きて。一門及び家臣らを聚めて。此事い加ぐ有。るきと。各く所存を尋ぬるふ。執事長崎圓喜が子。

高資といふ者進み出て君をば速に遠國に遣はし進らせ。大塔宮を殺し。隱謀の徒を誅せしむ言ふ。二階堂貞藤と云。しは諫めて。君雖不君。臣不可以不臣と云。御隱謀のあせ。君よし思召立とも。武威盛あらむ程を。與し申は者有らじ。是ふ就ても武家彌く慎みて。勅命ふ應せば。君も恥どし思召し直は事無らむ。斯てあそ國家に泰平。武運の長久よて侍らむを言ふ。此、貞藤が引とる漢語也。まれち彼國の志事ども。悉く我が皇御國の君臣の道の意ふ叶て。誠なる言ふぞ有らば。高資怒りて。異朝は。文王武王臣として。無道に主伐討し例あり。吾朝は。義時泰時下とあて。不善の君を流す例あり。然れど古典も。

君視臣如土芥。則臣視君如寇讎。とあり。事停滯して。武家追討の宣言を下されど。後悔せよも益有らトと。居長高も成て言勸むる。高時ふりく其議を然とあて。評定それふ決しけり。此高資が言ふ。文王武王と云へるハ。周の文王武王が事あり。上云る如く。其主殷。紂王を討て。不せるは。武王あまき。其逆事也。父文王が遺策に依れる事ある故ふ。かく云りと聞えと。其を西籍概論論ふ。論ふを見るは。はて愛ふ古典ふやて引出し。依ハ。孟子と云ふ漢籍の語あり。抑古の孟軻と云し男は。岡部翁の國意考ふ。勸化僧の類ありや云れし如く。表ふを聖道を説くや稱して。裡ふは國に北諸侯と云ひし酋等也。謀反を觀を歩むし惡者あるが。此語を。漢土のおぞ。王統定らば。加於彼が當時の如く。亂

世ふて昨日まで齊國に仕子し者の。今日は楚國に仕子。或
を互に相仇あむ國に北酋らふ遊説を執る。孰もも臣と稱
えて。世は渡れる私の君臣どちらは。然も有らざれど。我が天
皇命に。万姓を臣とし給ふ。君臣の道を。天照大御神の定米
給子依御道ふて。然る私事非也。但し御國もても。中古よ
や聞え奉公。辨あど云ふ言さ。子は出来し後。たかの良禽の
木を擇ぶ。ちふ語に如く。主を擇びて仕ふるも。常あれど。然
る私に君臣の上ふ。ハ。諷ゆる三諫ふして。聽れざ依時は。迷
く道も無き。非也。然る主より従を見ざる。と。土芥の如
く。せむ。ハ。孟軻の語の如く。自らうらふ。然る意は。ハ。恨
を思ふ。まじれた物も。非也。是もやごと。無き人情あれど。恨
其は上ふ云。依如く。通く。藝命。戎。葦原。中國。北君と定えて。天
降し給子れど。君臣は名分あり。ふ定めて。國內に孕はく者。

盡く其臣あらざ。云ふ事あり。然れど。通く。藝命より。當今
まで。天照大御神に。即賜ひし高御位に。御坐して。天璽に神
寶を受傳へ給ふは。幾万代を重んずとも。大御神に。御眞子。あ
ご御一代を仰ぎ奉る道。依故に。其長き聞ふ。よし善惡盛
衰交り有りて。君くあら。惣御事ありとも。臣くあら。依事
能わざ。依御道あり。其。天照。多日の。國土を照さふ。
背き奉ること。能わざ。と。同じ。道理あり。然るは。私の。然る
君といふ。ども。は。是に。準ふべき。事とぞ。思はる。然る
ふ高資。そ。北本義を。忘却して。然る。西戎に。卑しき。君臣のう
たを。言。依。邪義を。執して。逆意を。勸むる。張本を。爲さる。は。謂
ゆ。依。拘子。定規ふて。俗の。頑儒ら。漢籍を。引用ふる。様。ま。

大凡かくの如し。その西籍概論を委しく論ずれば、周文武
が其主伐討し事と。此語を引くるは、同書に、武王が紂を
弑せ依事を。獨夫の紂を。天に替りて誅せ依りて。君を弑せ
依るは非交と。誣ある語も有れど不也。然れど紂王を獨夫
對陳せる時、數十萬の軍兵ありて、周の賊兵を恐れしめ、
亡びて後も、亦其旧恩を戀ひて、數十年が布ど、周は從
多射向ひたる國、四十餘國ありき。此を殷北頑民おど号け
あるに、武王が弟北姫且と云ひしに、誣言あり、尚書の多士
多方の篇を見て知、遂に斯て俗の儒者ら、暴惡の事をし云
は、紂王を口実と云れど、其を孟子おどの勸化語に擬せし云
て、然れと思ふこそ有き。實に論語に、子貢が言、る如く、紂が
惡さしも甚しから、紂ども、武王が主殺し北罪をいひ、紂と
むと志て、後お惡とし云へむ。皆紂の罪也。孟子は、然る誣説に書れ
王が事、誣つけあるおぞ有る。孟子は、然る誣説に書れ
依故に、朝廷には用ひ給を交を聞えて、臥雲日件録に、文安

五年五月、條に、大外記伏原業忠曰とて、吾朝用漢土書、必有
朝廷施行之命。如孟子、則未施行之書也。と見えあり。宇多、天
世に、藤原佐世、朝臣の奏進せる、見在書目錄に、儒家部、孟子
子趙注の目あり、然れど早く渡りて、有於れど、絶行北命
を無正しあり、斯て後醍醐天皇の御世に、玄慧法師と云る
が、始て程朱の説を用ひて、儒書を講じけるを、尺素往
來に見えて、當時かく高資が其語を引用ひたるを思ふ。
漢籍意の世に、毒を為すは、いと速き物ありし。是を以て、
師を玉銚百首に、きも向ふ心さくじ、中にも、漢の教ぞ人
あしくある。漢さまの、けりし、心移りてぞ、世人北心あし
くあり、然る言からずやも。此書を吾朝ふては、施行し給は、
依事。かの國も、早く聞えて有し故に。後北物おぐら。五雜
俎地部に、皇國北事を云る所。凡、中國經書、皆以重價購之。
獨無孟子云、有攜其書往者、舟輒覆溺。此亦一奇事也。と載せ

正。然依誣言をし。神北惡ひ給ふ由縁ありて。舊く然る事も有し。ふこそ。京師の亡友。立入經徳云く。伊藤坦菴が老人雜素讀を教ふる人あり。公家の中。山科殿知りて。四書のふり。孟子に至りて。本を人。山科殿知りて。終に教。實明經道の博士。北古訓。此頃。讀む例ある。孟子ハ。未施行の書。おれ。古訓。おれ。故。論語。おど。の如く。郵。能ハ。是をもて。本を人。貸。る。託。して。止。れ。け。む。其。今。世の音儒者。ら。ぐ。如く。譏。も。る。百姓。よ。み。若。く。ハ。朝。廷。未。施。行。の得。ざ。ら。む。と。言。正。誠。も。然。る。若。く。ハ。朝。廷。未。施。行。の書。ある。故。ふ。教。牙。難。し。と。は。言。ひ。難。ぶ。由。あ。ど。有。ち。て。元。徳。三。年。八。月。改。元。あ。り。て。元。弘。を。號。ふ。此。月。北。二。十。二。日。ふ。東。使。兩。人。三。千。餘。騎。ふ。て。上。洛。し。加。の。六。波。羅。の。陳。屋。小。著。し。て。い。は。ど。文。箱。を。も。開。り。始。先。ふ。何。と。う。志。て。聞。え。け。む。今。度。東。使。北。

上洛也。主上。拔遠國子。遷し進らせ。大塔宮を。死罪。お行ひ奉らむ。爲あり。む。叡山。お披露有。けれ。む。二十四日夜。お入。て。大塔宮。よ。正。竊。お。此。由。字。奏。して。今夜。急。も。潛。幸。有。は。し。せ。て。計策。ど。も。猶。申。させ。給。ひ。け。正。其。策。ハ。今。夜。急。も。南。都。の。方。牙。御稱。せ。し。め。て。山。門。牙。上。せ。ら。れ。臨。幸。の。由。字。披。露。し。侍。り。賊軍。定。め。て。叡。山。お。向。ひ。て。合。戦。を。致。し。侍。ハ。む。然。る。程。お。ら。ば。衆。徒。吾。山。を。思。ふ。故。も。防。ぎ。闘。ふ。身。命。を。輕。し。侍。べ。し。凶。徒。力。疲。れ。合。戦。數。日。お。及。む。伊。賀。伊。勢。大。和。河。内。の。官。軍。を。以て。却。て。京。都。を。攻。ら。れ。む。凶。徒。の。誅。戮。隨。を。旋。ら。ら。る。と。見。え。矣。國。家。の。安。危。あ。は。此。一。舉。お。侍。あ。り。と。申。さ。れ。け。る。と。見。え。正。其。夜。は。大。納。言。師。賢。中。納。言。藤。房。そ。は。弟。季。房。お。ど。宿。直。お。り。し。拔。召。て。議。し。給。ふ。藤。房。卿。を。か。く。北。御。思。案。お。及。ば。ば。御。急。ぎ。有。は。し。せ。て。御。車。を。女。房。車。の。さ。は。お。裝。ひ。て。主。上。と。

神器と成乗せ奉り。中宮の行啓と詐り稱して。出し進らせ
け依ふ。大納言公敏。中納言具行。少將忠顯あど。三條河原ふ
て追扱交奉ら依。此ふて尹。大納言師賢。瑤輿を許され。臨
幸此由ふて。叡山。牙登らし免給ふ。此は大塔宮北御計策ふ
をゆ給。牙依形ゆ。斯て師賢。卿。衣籠の御衣を著て。瑤輿ふ
隆資。二條。中將。為明。中院。左中將。定平。あど。み衣冠正くし
て。供奉の躰。相從ひ。西塔の釈迦堂。皇居と成され。主上
山門を御憑み有て。臨幸成。さる由。衣披露有。なれ。山坂
本は云ふ。及。諸方北兵ども。我。先。六波羅。主上山門
西兩塔。充満して。雲霞の如くあり。六波羅。主上山門
牙落させ給。牙ゆと聞て。勢の附。さる前。攻。よ。て。海東。仲
家。佐。木。時。信。あど。云。ふ。賊。將。ども。を。向。けて。大。手。小。五。千。餘
騎。擲。手。小。七。千。餘。騎。ま。御。兄。妙。法。院。宮。と。も。御。旗。を。擲。ら
る事。あ。れ。だ。大。塔。宮。ま。御。兄。妙。法。院。宮。と。も。御。旗。を。擲。ら
きて。御。合。戰。有。ら。依。ふ。賊。軍。大。き。ふ。敗。北。して。海。東。は。討。れ。佐

佐木も這く北躰。子て京。小。歸。れり。此を坂本合戦と云ふ。山
門の大衆。事始。よしと悦び。其翌日。本院へ臨幸。あし奉
る。儀。し。て。衆。徒。ら。参。列。し。ける。折。ふ。し。深。山。お。ろ。し。烈。く。あ
て。御。簾。を。吹。上。あ。る。小。龍。顔。を。拜。し。奉。れ。た。主。上。小。も。御。坐。さ
ば。大。納。言。師。賢。卿。天。子。北。衰。衣。を。著。し。給。へ。依。ふ。て。有。け。れ。た。
大。衆。ら。興。を。醒。し。て。其。後。も。参。り。仕。ふ。る。事。も。無。さ。し。う。ば。所
て。ハ。何。あ。る。野。心。有。ら。む。も。計。難。し。と。兩。宮。を。始。免。師。賢。卿
あど。皆。山。門。を。忍。び。て。主。上。の。潛。幸。を。給。へ。る。御。所。可。と。志。し
て。ぞ。落。行。き。給。ひ。け。依。此。を。ち。了。主。上。を。三。條。河。原。よ。り。張。輿
同。月。二。十。九。日。北。夜。あ。り。た。は。主。上。を。三。條。河。原。よ。り。張。輿
ふ。召。替。られ。諸。卿。と。ち。は。衣。冠。を。解。て。京。家。北。青。侍。あ。ど。の。女
姓。を。具。せ。依。體。小。見。せ。て。御。輿。の。前。後。小。供。奉。し。て。南。都。に。赴
た。給。了。る。が。遂。に。笠。置。寺。小。臨。幸。し。給。ふ。然。る。ふ。近。き。邊。あ。る
兵。士。は。稍。集。り。し。う。ぞ。宗。く。し。た。大。名。も。一。人。も。参。ら。ば。是。ふ
天皇御夢。小。感。じ。給。ふ。事。あり。て。河。内。國。金。剛。山。北。西。に。楠。正

成ある事を尋祢聞看カコシメされ。藤房卿を勅使として。召寄シヨシふま
ひ。東夷を滅ホぶし。帝位を興復し奉るべき由を季祢給ふ。正
成畏カシマりて。己オノが郷カシマ小歸りて。急イサ小赤坂山小城を構カりて。義兵
の旗ハタをぞ揚アゲとてけけ依よ。天皇御夢の趣を。紫宸殿の前庭に。大
茂れる本に。御座を設けたり。其を異しと見行たり程に。神
童二人來りて。主上を迎へて。其御座に居奉れり。御夢さめ
て。木の傍北南を捕字ふれり。捕氏ありて。朕を輔け
て。帝位を復せしむる瑞よこそと。御自のら御夢を合せて。
寺僧は尋祢まゐて。正成を召とるれり。或説ふ。此を前子貴
朝卿俊基朝臣の忍びて諸國を周られし時。小捕と語らり
る事の有りしを。天皇あろし看せる故に。夢を託して。召
給へるありや云へれど。臆断の説ふて。信るは足らぬ。然依
聞小。主上笠置山小御座ありて。近國の兵士多く附従ツクシひ奉
るをし聞えしかば。九月朔日小。六波羅より。十万餘騎の大

軍を向けて。數度の合戦有ける小。官軍いねも勝利あり。賊
軍攻あぐみ。遠攻小扣ヒあてし中ち。二十九日北夜。密ヒソ小山子
忍シび登りて。皇居ミヤに火を懸カケとる賊ゾクあり。此を陶山藤三義高。
或ハ陶山次郎高通と云ふ書小。此こせき賊ゾクの手引テせしハ。笠置の東
依よ。青天白日と云ふ書小。其こ子孫血脉を引ヒて。今
小癩疾の者こえ。笠置飛鳥路ハ鄰村ありとも。今もあ
婚姻を結ぶ者こ親しき交りまじをさまりまざるありと云ふ。最も
かしこき天皇をしこも。惱ウレめ奉りつれこ。神の御憎も深く。是
其御崇りハ。裔の末はこでも。及びまたまたま事とぞ思おもはこ。是
小主上ミナト伐キ始め。皆みな跣ハダカふる。何處どことも知らしらし逃に出でまし。夜の紛マギ
れこ皆みな別わかれれ小成なりと依後よ。藤房季房のみ御手を引ヒ交ままく
も玉體を野人の形小替進かへらせ。赤坂城子と落行き給ふ。途みち

君の思寵いせ漢ウゆし人あり。辞世の頃ありて其奥に新
かゝる露の命北果ハ見たり。ちても吾妻北末ぞかし。新
らま給ひし時。四十三歳ありやぞ。増鏡源中納言具行も
吾妻へ率て行く。數多の中お取わきて。重うるべく。聞
は様異ある罪お當る。逐きよや。と有る。太平記。殿法印
良忠捕えられて。六波羅子出し時。北條仲時。一天の君ご
も。叶えせ給ハ。御隱謀を。御身繫と思立おむ事。相怒りこ
そ。先帝を奪ひ進らせむ。為。當所の繪圖まで。を持廻れる
一條。武敵の至り。重科雙おし。隱謀北企。罪責餘あり。計の次第
一。くお述られよ。と言ふ。法印答。予て。無道を誅せむ。勢を
隱謀を企る。おと。更お粗忽の儀。非。始より。威慮の趣を
存知して。笠置北皇居へ。参内せし。條。仔細あり。然るを。白地
子。出京の迹。おて。城。鞆。固。おく。官軍敗北の。間。力。おく。本意を
失。刃。ゆ。其。間。具。行。卿。と。相。談。して。論。旨。を。申。し。下。し。諸。國。の
兵。子。賦。り。し。條。勿。論。あり。普。天。北。下。王。土。お。非。安。と。云。こ。を。無
く。率。土。北。濱。王。民。お。非。安。と。云。こ。を。無。し。誰。う。先。帝。北。宸。襟。を
歎。き。奉。ら。け。ら。む。人。と。る。者。是。字。喜。ぶ。べ。ま。や。敷。慮。お。代。り。て
玉。躰。を。奪。ひ。奉。ら。む。と。企。る。事。お。了。う。は。粗。忽。ある。傍。き。を。返
答。せ。ら。れ。け。り。と。有。る。を。以。て。其。趣。を。知。る。し。此。法。印。を。聞。白
藤原良実公北孫おして。大僧都良室と云。し。人の子あり。彼

忠圓文勸おどぐ。前お白状せし。操とは事替りて。中納言藤
潔く。法師形がうも。最愛き人おこそおとしけれ。中納言藤
房。右大辨季房を。常陸國子流して。藤房卿を。小田兼秋。季

房。卿を。長沼。何某お預け。尹。大納言師賢。卿を。下總國子流し
て。千葉。介貞胤。お預け。あ。り。此。卿。を。志。学。の。年。北。昔。より。和

漢の才を事として。榮辱の中
よ。心。を。留。め。給。は。ざ。り。し。う。ば。今。遠。流。の。刑。に。逢。依。事。露。ば。う
ゆ。も。心。を。懸。て。思。え。れ。ぬ。主。憂。則。臣。辱。主。辱。則。臣。死。と。云。こ。を。繼
ひ。骨。を。醜。お。せ。ら。む。身。を。車。裂。お。せ。ら。れ。と。も。傷。む。べ。き。道。を
非。安。と。て。少。も。悲。み。給。え。ぬ。花。の。都。を。遠。く。申。け。る。を。聞。給。ひ
させ。給。え。む。或。る。御。悼。は。し。さ。よ。れ。ど。人。と。申。け。る。を。聞。給。ひ
て。別。る。と。も。何。う。歎。う。む。君。を。満。す。る。郷。と。あ。れ。る。都。を
や。遊。し。け。る。こ。を。理。お。れ。未。強。仕。は。満。す。る。郷。と。あ。れ。る。都。を
門。人。と。成。給。ひ。し。が。後。程。お。く。元。弘。二。年。の。乱。出。來。し。始。め。俄
お。病。お。侵。さ。れ。て。失。給。ひ。な。り。後。お。南。お。ほ。中。納。言。公。明。卿。別

朝より。文貞公と謚し給ひけり。とぞ。おほ中納言公明卿別
當實世。卿。大納言公敏。卿を始免。流し申せる人々多く。はと

彼右少辨俊基朝臣をば葛原岡ふて。工藤高景と云ふ者も
 斬しめ。前小佐渡國子流せる。日野資朝卿をも。本間入道と
 云ふ者も下知して斬らる。此元徳三年五月北事あり。
 神明鏡に倭基朝臣の葛原にて斬られ給ふ時の哥とて秋
 を待とて葛原はらふ消る身の露北恨みや世に残る心
 と見え。太平記に資朝卿の斬られ給ふ時は其子の阿新殿
 きて十三歳に成給へるが父卿の末期に達給むむとて暮
 ひ來給ふるに書残されし文に和翁懷屈平之楚思八回優
 游以到今日為汝為言秋霜三尺曾不理負松土見之路開眼
 晴酒く落く獨立乾坤之間とあり。阿新殿の父北敵を討れ
 し始末あど最哀ある事ども有とぞ所狹けられむ。一記
 じ。お此資朝卿の忠義あてし風操を見おべき事ハ。是より
 前小も大覺寺殿お流上皇とち。御隱謀北沙汰有し時小大
 納言入道為兼卿。そ此御企お與し申せゆせて。武家子搦欠

取られ行る。一。一條邊にて是を見て。何あ羨末し。世子有
 らむ者の思出。かくおそ有ま欲けれ。言せけと。徒然草
 小所見とるふても知法し。宿して居られける。片に者ど
 母の集まり居さるが。手も足も袖も斜み打りて。何く
 も不具も異様あるを見て。取らぬ類なき。解者あり。尤も愛
 みる。小足れゆと思ひて。守り居る程も。やがて興たて
 見憎く。いおせく。覚えけれ。直に珍うらぬ物。おと及
 と思ひて。滞りて後。おの問うる。木を好みて。異様も曲折
 ある。字求めて。目次悦むしめ。於るハ。彼片を者も愛する。れ
 正るゆと。興あく。覚えけれ。鉢子植さる。木どもを。皆布ゆ
 捨られけ。然も有べき事ありと見え。また西大寺の静念
 上人。腰屈まり。眉白く。誠小徳長と見る。有状おて。内裡へ参ら
 れける。西園寺内大臣殿。あお守のけしきやとて。信仰の
 氣色有。けれ。資朝卿。是多見て。年北寄さる。お侍と。申さ
 け。後日。おむく。犬の。浅まし。く。老けら。布ひて。毛は。な。さ。る
 を引せて。此。け。し。き。守。く。見。え。て。侍。と。て。内。府。へ。進。ら。せ。ら。れ
 け。と。ぞ。有。る。も。其。風。操。の。雄。く。あ。き。を。見。る。小。足。れ。り。是

不就て近ごろ何所の山ふ久しく念佛修行せりとて徳
本と云ふ瘦法師此むく犬めける出さるを愚俗東西
よ駈走りて己めき守み止ごと無き御辺りおも等召れ
て十念と云ふ事おど受給へ候も多うと風聞しちて
後おハ其まこせり狸の詐れり其由を因おも書て費あ
けるを往生せりと隠し詐れりと其由を因おも書て費あ
はき杯も委めゆ此に実あう無事おも有れど心あるき
は資朝卿の見られむと倫も多う候故も然る童論もあるお
そ資朝卿の見られむと倫も多う候故も然る童論もあるお
れむといや思はしくぞ所思る。斯て兼久北例せて後醍
醐天皇を隠岐國に。太平記に臣として君を蔑如し奉る事
めお後伏見院第一の御子を御位に即奉りて先帝御遷幸
の宣旨をおさるべきとぞ計らひ申れ流天下の事は於て
今ハ重祚の御望有ほおも有らざれ流天下の事は於て
おあし奉るべしとて香深の御衣を武家より調達せと
けれども御法鞋の御事を誓有まじた由を仰られて哀龍
の御衣をも脱せ給へば毎朝の御行水をめして太神宮の
御拜有れぬ天小二の日おけれども國は二人の王いま
に心ちして武家も持あつうひてぞ覺えける是も敬慮お

頼み思召おと有ける故あり三月七日隠岐國へ移し奉る
供奉の人をてハ一條の頭大夫行房六條の少將忠頭御介
錯おハ三位殿の御局ばうに外を皆甲冑をよろひ
て弓矢を帯せる武士共前後左右お打圍み奉る京中の貴
賤男女小路お立ちあらびて正し交一天の主を下として流
し奉る事の淺ましはよ武家の運命今お尽おむせ憐る所
もおく云声ちほさ小満て泣悲みけれぬお哀字催して
警固の武士も諸ともお皆鑑北袖をぞ濡しけるや有るも
後おぞ思ひ一宮を土佐國に遠流し奉り其餘の宮がとま
合されける。一宮中務卿親王をば佐々木時信を路次の御警固
同書し一宮中務卿親王をば佐々木時信を路次の御警固
おて土佐の畑へ流し奉る武士ども數多参りて中門お御
輿を指よせされぬ押了兼さる御涙の中お世きとむるお
グらみぞ無き涙川いのお流る憂身あるらむ同日妙法
院二品親王を長井高廣を御警固おて讃岐の國へ流し
奉る是も海邊近き所おれぬ毒霧御身を犯して津海の氣
まけまじく漁師牧笛の夕北声横雲海月の秋此色想じて
耳おふれ眼お遮る事北哀を催し御涙を添る嫌とあら
と云事おしと有るを思ふ候。御相おち茂も處く予配流
し。いお可畏き事おらばや。

ける事。上件ノの如くある。大塔宮のみは能く忍びて。東夷
の手不渡ヲと給え。還俗して吉野城小籠ヲり給ふる。謀ヲ
て搦手ヲより忍入シき依敵の防ぎ難く。宮も必死を極めて戦
ひ給ふ。しうぞも。遂不危ク。御心あら。亦も。村上義光。御身
不代りて討死せる隙ニ。湯浅元祿の常山樓筆餘。太平記
せ給ひ。城階り志とき。村上彦四郎義光。いまだ敵の餘所ヲ
廻り侍ハ。幾前ニ。落させ給へ。恐多き事。侍牙ト。召されし
錦の直垂を。下し賜りて。御命。代り奉るべし。云。詞を
よみて。涙を墮サぐる。武人ハ。必節義を忘る。人あるは。し
と云。牙ゆけ。凡そ忠臣義士の傳記を。読。常の物語と
思て。看過。人ハ。万巻の書を。読。りとも。何の益。あるべ
き。云。る。ハ。誠。辛うじて高野山へぞ落させ給ふ。かく苦戦
危難の中。不も。既。令旨。下して。忠義の武士を。語らひ給

ふ。新田義貞。足利高氏。赤松圓心。おども。其旨を承れ。承。お。正。
此。三人の中。高氏。遂。天下を掌握せむと欲。する。心。元
より有りて。姑く皇威を假らむ。為。應。奉。れる。術。計。あり
し。お。と。説。史。餘。論。君。美。為。し。の。委。し。く。論。の。ま。さ。る。が。如。し。
其。下。云。義。貞。然。ら。ば。元。より。朝廷。忠。義。の。志。あ
る。て。宮。北。令。旨。應。じ。奉。れる。れ。其。太平。記。を。始。め。其。世
の。書。ど。も。を。考。へ。合。せて。も。知。ら。る。れ。ど。近。く。筑。後。國。柳。河。の。
茅。山。猪。とい。ふ。人。の。南。朝。の。事。を。考。へ。と。る。行。在。或。問。と。云。ふ
物。吾。が。藩。の。佐。田。氏。ハ。新。田。氏。不。出。あり。世。譜。の。旧。記。あり。
世。間。い。ま。と。見。ざる。所。あり。故。今。そ。の。三。條。を。奉。と。て。記。せ
る。中。不。義。貞。年。十。七。謂。族。人。曰。吾。家。世。く。任。朝廷。凡。牙。討。叛。撥。
亂。義。不。貞。則。不。可。自。名。曰。義。貞。謂。弟。小。次。郎。曰。吾。奉。義。則。義。宜。
為。其。助。延。名。之。曰。義。助。後。醍。醐。帝。在。笠。置。山。義。貞。欲。奉。兵。馳。使。
者。乞。論。旨。未。到。行。在。陷。義。貞。輟。と。云。是。不。於。て。諸。國。兵。武。士。よ
へ。る。事。の。有。る。を。も。思。ひ。合。ま。べ。し。義。兵。を。舉。る。者。多。く。北。條。不。從。ふ。凶。徒。ら。伐。處。く。不。て。誅。せ。る
よし。主。上。隱。岐。國。よ。て。傳。牙。聞。召。して。六。條。少。將。忠。顯。朝。臣。は

加ゆを召具して。密に御所を御出ありて。辛うして伯耆國
へ行幸し。名和長年と云ふ武士を御憑み有、けれむ。畏りて
船上山をいふを皇居と爲て。一族二十四人。軍兵纒ふ百五
十騎。警固し奉る。翌日。加北隱岐國。主上を預り
惱まし奉れる。隱岐判官清高。三千餘騎。推寄ける。長
年。武略。甚く。賊兵を討破り。けさば。清高を六波羅へ
逃上りぬ。斯て後醍醐天皇は。隱岐國より遷幸ありて。船上
に御坐。由聞えけれむ。兒島高德を始め。山陰山陽四國九
州の兵ども。我先と馳参り。皇居を守護を奉りき。是より先。正成ぬし。ハ。勅。應じて。義兵を起し。河内國赤坂城。小勢を以て。逆徒の大軍を攻。後。千。破。城。も。小。勢。を。以

て大軍を破り。其。辛苦を尽されつる。趣。ま。と。菊池。土居。得能
等の諸將。朝廷。仕へて。忠。ありし。事。ども。ハ。人の知る所
あれ。今更。云。云。其。世。斯。有。けれむ。赤松。則村。入道。圓心
の書。ども。就。て。見。し。大塔。宮。北。令。旨。を。承。り。て。播磨。國。よ。都。小。攻。上。り。六。條。少
將。忠。顯。朝。臣。は。勅。を。奉。り。て。赤松。等。の。諸。將。と。共。小。六。波。羅。を
攻。れ。む。相。摸。入。道。甚。く。驚。き。重。補。て。名。越。高。家。足。利。高。氏。の
二人。小。大。軍。を。添。て。指。上。せ。り。依。小。高。家。一。戰。小。誅。せ。ら
れ。高。氏。は。降。参。り。讀。史。余。論。小。高。氏。初。累。代。の。親。昵。を。捨。て。
きて。天下。を。乱。れ。て。朝廷。其。微。功。を。報。ぜ。ら。れ。し。程。亦。く。朝廷。不。叛。
過。と。れ。元。よ。我。が。家。の。為。を。計。り。て。朝廷。の。御。為。を。起。せ。
る。軍。あ。ら。補。む。終。ハ。朝廷。を。叛。き。参。ら。せ。む。事。ハ。議。て。思。ひ
設。け。し。処。あ。る。べ。し。され。と。朝廷。を。背。きて。大。塔。宮。を。殺。し。其。
後。恒。良。成。良。の。兩。親。王。を。殺。し。参。ら。せ。し。事。ハ。是。み。亦。直。義。
が。奸。謀。よ。出。り。と。見。え。り。猶。次。く。小。云。を。見。て。知。る。所。也。

爰小新田義貞。一族と共に大塔宮の令旨を賜り。上野國よ
て義兵の旗を揚げし。忽ち大軍と成て。鎌倉勢を討破
り。纔小十五日の間。鎌倉を攻落し。高時入道。一族郎從八
百七十餘人と共。東勝寺小入り。自害して一時も亡び失
と正死。此元弘三年五月廿二日あり。抑北條が代。然れり北逆あ
りあぐら。八世までも相續せしは。全く泰時が餘勳の。高時
まで小及ぼる小ぞ有。依。其前も論へるを合せ考ふは。かくて忠顯朝
臣。赤松圓心。足利高氏等の官軍を。六波羅を攻落し。兩六波
羅ある。北條仲時。北條時益等の賊徒。悉く誅伏しけれむ。
元弘三年五月廿三日。小。天皇船上を御發あり。此時正成を千無破の奇

手を追討して。摂津國兵庫小御駕を迎へ奉りき。同六月七日。京師小還幸坐まし。高
時が立進らせし。光嚴院の御位を廢し給ひ。是よ正天下
は。公家一統の御政事とありて。大御心の儘ありけれむ。は
於勳功の諸將を賞せられし。皇御祖神とちよ正。御傳
牙坐る古道を。深くも順考を給む。大内裡を再興し給ひ。
漢風を御尊崇ありて。文を重くし。武を輕くし。且天下の大
事小寸功あり。二心をち牙小懐ける。雲上の文官とち。或を
高氏が輩小は。高位高祿を賜ひ。身命を惜まぬ。大功あり
し武官とち。圓心らをば。猶元の如く。卑め賤し給する故小。
諸國の武士小。朝家を恨むる者多く出來て。中小も足利高

氏と云ふ逆臣出て。朝廷を甚く悩め奉れ。彼の説史余論
急務、刑賞の二、まゝくハホシ。小功此輩の事ハ云、及バ安
まづ賞せられし。大功の人、其功の多少を論ぜられし。其
悉く其所を得ざりき。今試よそ此功を議せむ。護良王の
功ハ申出小及む。但し是を正しき御父の爲おれ。然も
有べくや。功臣よ於てハ、正成を以て第一と云べし。其故
始め笠置落て。天子西州に蒙塵ありし時、小當りて。六十六
州の内、あぐ此一人、其節を改め、武家よ背く輩も、彼おれ出
國北大軍と戦ひ、年を経し間、武家よ背く輩も、彼おれ出
來しあり。此人、うく王家の御爲、小勲勞あり。まじら、新
田、足利、赤松等の、人々も、其志を立、事叶ふ。うら、寄、借、そ
の次、義貞の功、尤大あり。是、その巨魁を亡せし。故、お
ゆ、さて、其次ハ、赤松名和、い、は、れ、を、上、と、し、孰、れ、を、下、と
ま、さ、き、赤、松、が、功、小、非、常、ハ、六、波、羅、を、破、れ、し、帝、と、り、船、上
ま、坐、し、ま、は、と、も、鎌、倉、い、は、ど、亡、び、去、六、波、羅、い、ま、ど、破、れ、ざ
ら、む、し、ま、は、行、在、尤、危、ふ、か、ら、む、名、和、乘、輿、を、迎、へ、て、是、を、守、り
参、ら、せ、ざ、ら、む、は、は、假、令、鎌、倉、亡、び、し、ゆ、と、も、誰、が、爲、小、う、其、
功、字、も、奏、む、べ、き、然、も、あ、れ、ど、究、鳥、懷、よ、入、を、む、猶、者、も、是、を、
憐、む、と、云、へ、正、は、し、て、況、や、万、乘、の、天、子、の、御、頼、あ、ら、む、よ、も、

凡そ人、とらむ者、いうて、身を以て守り、参らせざる。其
功、多、ある、お、似、と、れ、ど、其、事、ハ、ま、と、お、し、難、し、と、も、思、ハ、ま、は、
天子、既、に、海、外、に、移、され、給、ひ、て、武、威、殊、の、外、に、張、り、し、日、お、
都、の、外、遠、う、ら、ぬ、境、に、兵、を、起、せ、し、事、ハ、其、功、長、年、に、及、む、ざ
る、が、如、く、お、れ、ど、も、其、事、ハ、成、し、難、し、と、や、云、べ、き、高、氏、の、功、
を、称、さ、す、べ、き、処、お、き、お、や、東、兵、久、し、く、正、成、が、爲、に、苦、め、ら、れ、
赤、松、が、兵、新、と、お、起、り、天、子、舟、上、お、迂、り、給、ひ、て、官、兵、都、に、赴、
き、事、以、の、外、に、難、儀、と、る、よ、し、聞、え、且、を、高、時、が、ふる、ま、い、當、
ま、亡、び、終、べ、き、時、至、る、事、を、は、の、あ、と、り、見、及、び、な、れ、む、年、頃、
の、志、事、成、り、終、べ、き、時、を、待、得、つ、と、思、ひ、し、う、む、官、兵、は、
べ、き、由、を、申、せ、し、う、ど、六、波、羅、北、亡、び、し、日、と、て、も、仕、出、し、と、
る、程、の、戦、功、も、有、ら、ざ、り、き、然、る、に、此、人、を、賞、せ、ら、る、く、小、弟、
一、の、功、を、以、て、せ、ら、れ、し、ハ、心、得、ぬ、事、お、り、云、く、は、ま、と、其、代、に、
大、功、と、云、れ、し、人、の、功、を、議、せ、ら、れ、し、ど、よ、誤、多、し、と、見、え、
されむ。況て、其餘、小功、此輩、の、忠、否、明、う、あ、ら、ざ、り、し、お、と、太
平、記、等、お、記、せ、る、が、如、く、お、る、所、し、さ、ら、ば、お、ど、世、乱、れ、む、し
て、有、ら、ず、然、む、り、勢、ハ、盛、り、あり、し、北、條、が、誓、し、の、間、お、誅
せ、し、お、と、叡、慮、お、出、お、る、は、論、あ、ら、れ、ど、専、ら、大、塔、宮、の、

其功を助成し給ふるおぞ依れりける。其れ前より引とる君
く。始め此宮の御計策よて、逆徒の危急を逆置山より避け給
ひ。まよ新田赤松始め諸國の武士多くハ此宮に令旨を承
りて、義兵を起しつるより、逆徒の衰へとありしを思ふほし。然れど逆徒伏誅の後、此
宮を征夷大將軍に任せ、忠義の武士たち悉く其御武威に
服従をけるを。高氏は元より逆意あるお依り、その御威名
を忌嫌ひ。主上此御心をせり奉り。種くよ讒言し。宮に御隱
謀ある趣お申おし参らせけれど、竟お宮をば。高氏の弟直
義お預け給ひし。情おくも鎌倉お送り、土牢お入れて苦
め奉り。後より其從者ある。淵邊義博と云へ依賊を以て。弑し
奉りき。最く憎き逆罪おぞ有、依。保曆間記お高氏昇殿官
途ハ成りしうと。させる

恩賞もあし。其故ハ大塔宮さく。子申させ給ひたり。高氏兵
権を執らむ。昔の頼朝お替るべうら。此、次より討討せらる
所しと申されたるを云く。とあるハ、いと心得ぬ事お
す。其れ君美徳の論も、梅松論保曆間記の説
みお武家の爲。潤飾せし物あり。高氏越階して從三位お
昇り。参議おあされ。三國の守護を賜ふ。いうて。させる恩賞
もあくと。いふべき。太平記。高氏宮を誅せし由。載とす。
されど保曆間記の説。建武元年といふよ。以下を。則高氏
が説説の趣。あう有しと見ゆ。又此宮をせしめより。高氏を叛
臣と御覽じて。征討あるほしと。思召されし。おと。尤その謂
れ有る事と見え。難太平記の説。お依きは。高氏武家の
代を奪むむと思ひし事。年久し。只高氏直義兄弟。かく思
ひしのみ。お非也。家時貞氏の代。其志ハ有し。うと。便お
うりし。うば。さてのみ。過き。高氏の宮。方より参りし。只その
勢を假れるのみ。お朝家の御爲。義兵を擧られし。お
非也。かくて。天下此有。思ハざる外。公家一統の代。お
りし。うば。い。う。おもして。故右大將軍の如く。武家此代。お
さむ。やと思。れし。事を。宮ハとく御覽し。付られし。うは。違
り。討給ふ。ほし。と。思。召。されし。うと。御免し。あ。う。り。し。を。と。う
く。あ。め。ら。ひ。給。ふ。間。よ。高。氏。や。が。て。其。叔。母。して。准。后。よ。誅。へ

申せしを帝竟ミカドも惑マヨひ給へり、と云、斯コトて建武二年の秋、高時
れとるは、最正サイテイしき論ロひありけり。族ウヂある。北條時行と云、者起タチりて、鎌倉カマクラに攻入ウツりて、直義
は、成良親王ナリノミコに供奉クワンして、三河國ミカワに奔ハりき。是より前、成良親王を征夷大将
軍イクサに任トじ、直義ナオノ義を守護マモとし、此コト時高氏タカウヂを都ミヤコに在アりて、此事コトを聞キ
て、鎌倉カマクラに置オかせ給タひしあり。東國トウコクに向ムち、此事コトを乞コひ奏ウす。征夷將軍イクサノシ、諸國シヨクの總追捕使ソウソツポウシ
に補ホせられ、此事コトを望ノゾみけれど、勅許テウキョありて、けるふ。此も其
まふく、勅許テウキョあらば、まぐり鎌倉カマクラに止トりて、頼朝ヨシトカの事コトを行ハす
むとの心ココロありし事コトいと明アかり、其ソノ次ツギ、云イハせ、を合せ考カふ
し、恣シに發向ハツキョウして、時行トキユキをば討破ウチウツせしうぞ、鎌倉カマクラに居イりて、自ら
征夷將軍イクサノシと稱イハし、先マに新田ニフタの一族イツクに賜タマひし、東國トウコクの所領シヨウを、
悉シツく闕所ケツショに、己ミに功コトある者モノにぞ充行ウツキひける。其上ソノに猶ナ

己ミが逆罪ギャクツミを隱カクさむ爲タメに、奏狀ソウジョウを獻タテマりて、義貞朝臣ノブタカノミコノミを讒ソウし、則スな、
軍イクサを起オして、上洛ジョウラクせ、と聞キえけむ。主上ヌシノミ甚コトく逆鱗ギャクリン坐マま
し。高氏タカウヂが官爵クワンキョクを削クじ、義貞朝臣ノブタカノミコノミを大將ダイショウとて、高氏タカウヂを征伐テイバツ
せし免給メシふ。爰コトに直義ナオノ義を、二十万餘ニジュウマンヨリの大軍ダイイクンに、三河國ミカワ矢矧ヤシヅメ
川カハまで出向デウキョウひ、禦ノぎける。官軍クワンイクン二度ニドの戦タケに、打勝ウチカサて、賊軍ソクイクン鎌
倉カマクラまで引退ヒキヒき、既スに高氏タカウヂ兄弟ケイテイをも、誅戮シツロクせよべき勢セひありし
ふ。十二月十二日ジュウニゲツニジュウニニチ、箱根竹下ハコネタケノシノの戦タケに、大友オホトモ、左近將監ササネノシロノミ、貞載ノブノミ、塩冶シホヅメ
判官ハツカン高貞等タカノブノトナリ、俄ニガに賊軍ソクイクンに成ナりて、官軍クワンイクンの背セを射イりて、しかば、義
貞朝臣ノブタカノミコノミ遂ツに敗マれて、力チカラなく、尾張國オウヅマまで引退ヒキヒく。此コト時朝廷テウテイを
恨ウラみ奉ホウる輩ハヒ、赤松圓心セキマツエンシンを始め、諸國シヨクに起オりけむ。義貞ノブタカを都ミヤコ

不召歸して。守護せしめ給ふ。斯て高氏を諸國の逆徒を
招集め。大舉て都を攻む。時、叡山の僧道場坊祐覺
と云者。山徒の義者千餘人を語らひ。近江國伊岐洲。高
氏を拒ぎしが。力盡て討死し。佛法の世。益なきハ論おけ
まど。此法師也。大義をも辨へ
て。朝廷の難お死し。さをも大皇國の御
民とる道理も叶ひて。いと殊勝ある事。こそ。賊勢いと
く熾ありし。うば。天皇ハ三種の神器を奉りて。叡山に臨幸
を給ふ。此時高氏が皇宮を燒きし。あど。暴悪の事
どもは。太平記あど。見えたるが如し。然る。小鎮
守府將軍頭家卿を。義良親王を供奉て。陸奥國よ。攻上
り。權中納言實世卿を。忠房親王を奉じ。東山道より上洛
し。義貞。正成。長年等の諸大將と。力を合せて。大く逆徒を攻

破り。高氏兄弟を。筑紫に敗走せしむ。ば。天皇再び皇宮に還
幸を給ふ。是延元元年二月二日あり。正成朝臣ハ。此機會に
其根帯を絶つしと申されし。其言竟し。用
られざりしは。いと。可憐き事ありけり。同三月。菊池武
敏。筑前國多く。良濱。高氏と戦て。打負け。關西の武
士。逆心して。高氏に屬する者多き。よ。義貞朝臣に勅を
て。中國に發向せし。給ふ。爰に高氏思慮をけるは。味方毎
度の戦に。打負る。よ。全く朝敵とる故あり。何れもして。持
明院殿の院宣を申賜り。天下を君と君の御争や。あして。
戦を免と。深く奸智を廻らし。熊野別當の子。藥師丸と云者
を使として。其事を光嚴院に。乞奉りける。よ。や。が。三寶院

僧正賢俊と云、依法師を以て、院宣を下し賜りき。此を前、北條時宗が、持明院殿、大覺寺殿の御兩流、代るく御世知、志召、去、去し、定め奉れるより、竟、御兩流の御中、善うら、く、かく、逆臣が乞、院宣を下し賜、るは、最も悲、あき事、あ、けり。そは、初、卷の末、論へ、加、くて、高氏を、院宣を賜、り、勢、ひを得て、大軍を率、る、海陸よ、都、不攻、上、るよし、聞えける。正成朝臣を、此、度も、は、と、叡山、不、行、幸、ありて、敵の勢を避、け、其、糧道、を絶、ちて、懈、らむ時、官軍力を合、せて、挟、み攻、め、む、は、必、勝、ある、は、き、由、を、奏、されし、う、と、御許容、あ、く、速、く、發、向、を、て、逆、徒、を、征、伐、去、去し、と、ぞ、仰、下、され、け、依、

太平記、を、按、ぎ、る、は、此、時、正成、さ、て、ハ、勝、軍、を、全、く、せ、む、との、敵、慮、は、非、安、討、死、せ、よ、との、勅、定、ある、は、義、の、爲、に、身、を、顧、み、ざ、る、は、忠、臣、勇、士、の、所、存、あり、と、て、是、を、最、期、に、合、戦、と思、を、れ、ぬ、れ、ど、嫡、子、正、行、が、今、年、十、一、歳、に、て、供、し、と、り、ける、を、招、て、申、さ、せ、ら、る、は、今、度、の、合、戦、天、下、の、安、否、と、思、ふ、お、れ、ど、今、生、よ、て、汝、を、見、む、こ、と、是、を、限、り、と、思、ふ、お、れ、正、成、既、に、討、死、を、と、聞、う、ぞ、天、下、ハ、必、高、氏、の、代、を、成、ぬ、と、心、得、は、し、然、れ、ども、一、旦、の、身、命、を、助、ら、む、が、爲、に、多、年、の、忠、烈、を、失、ひ、て、降、人、不、出、る、事、ある、べ、う、ら、む、一、族、若、黨、此、一、人、も、死、残、り、て、在、ら、む、不、ど、ハ、金、剛、山、の、辺、に、引、籠、り、敵、寄、せ、來、ら、む、命、を、奉、由、が、矢、先、不、加、け、義、を、紀、信、が、忠、不、比、を、信、し、是、ぞ、汝、が、第、一、の、孝、行、あ、ら、む、と、申、含、め、て、云、く、と、見、え、て、其、健、く、雄、い、し、き、忠、心、の、程、を、思、ひ、や、る、も、涙、流、れ、て、記、す、事、能、ハ、ぞ、い、う、で、人、さ、ら、む、者、あ、を、見、て、憤、激、の、心、を、発、さ、げ、る、は、非、じ、と、ぞ、思、ふ、正、成、朝、臣、は、其、獻、策、も、用、い、ら、れ、ど、今、日、を、最、期、と、思、ひ、定、め、手、勢、纔、不、七、百、餘、騎、を、率、ゐ、て、湊、川、に、發、向、し、直、義、が、大、軍、と、血、戦、し、て、數、度、逆、徒、の、軍、を、駈、破、り、直、義、も、既、に、討、れ、つ、は、き

高氏が計らひふて。光嚴院の御弟、豊仁親王を立て。京師小
帝と稱し奉り。猶建武の年號を用ひらる。光明院と申すは
是れ也。爰あ至いたて。高氏たかが奸謀けんぼうや成なりりて。天下てんか小こ二に柱ちゆうの天
皇御み坐まさる如ごとく。世よの大義たいぎを辨わり知らぬ者ものハ。何なにれ
の實まことの天皇てんかうとも思おもひ感あはれ奉まかり給たまふ。竟つひに畏おそれあはくも。天津あま日ひ
嗣ついでの神宝かみたからを御傳みまり坐まさる。天皇てんかうを。吉野よしのの荒山あらしやま中なか小こ遠落とんとし奉まか
り。吉野よしのの大宮おほのみや也なり。有あれども無なき。如ごとく小こ弱じやくまじ
奉まかれるハ。最もも畏おそく憎にくむべき逆罪さか罪つみ小こぞ有ある。同十月どうじゅうがつ。高
氏たか偽いつはりて天皇てんかう小こ誓詞ちかひことばを獻けんりて罪つみを謝あやし。奏聞そうもんをけるハ。此事このこと
御許容ごきよかうありて。京師きやうし小こ還幸えんかうし給たまはる。供奉くわんぷんの諸卿しよけい以下いげ悉しつく
本官本領ほんくわんほんりやう小こ復たがし。天下てんかの成敗せいばいを。公家くわが小こ任まかせ奉まかるべきよし。
使者しやを以もつて欺いつはりき奉まかりし小こ。天皇てんかうは是こゝろを偽いつはりりとは知し召よさる。
勅許ていこあらず。既すでに小こ還幸えんかうあるはき小こ定さだまける小こ。是こゝろまじ憎にくむ
とも憎にくむ

計けい小こて。加かく奏そうし奉まからば。天皇てんかう必かならず信しんじ給たまひて。一度いちどを還幸えんかう小
るは。然しからば新田しんでん氏うぢ等の忠臣ちゆうしんハ。孤立こりたと成なりて。亡なび知しぬべ
し。然しかして己おのれ一人ひとり。天下てんか北きた兵權へいけんを奪うばひむせの。新田しんでんの一族いちぶを。
謀計ぼうけいあるべし。其その次つぎも云いふを見て知るは。新田しんでんの一族いちぶを。
其その時とき坂本さかもと小こ在ありて。賊ぞくを防まぎ居ゐられければ。夢ゆめ小こも是こゝろを知ら
ず。然しからば堀口ほりぐち美濃みの守貞しゆぢん満みち。いち速はやく此こゝろを聞き出し。急いそぎ參内さんない
して。事ことの様ようを窺のぞふ。只ただ今いま行幸かうかうあるはき御有ごあり状じやうおれむ。力ちから
免まぬれ諫奏かんそうをけられど。御許容ごきよかうあく。太平記たいへいき小こ此こゝろ時とき貞満しゆまん風筆ふうふでの
されたるは。還幸えんかうのあと。兒女こゝろ北きた説せつ幽ゆう耳みみは觸ふれ候まをつれど
も。義貞ぎぢん存ぞん知し仕しらぬ由よしを申まを候まをつる間ま。傳説でんせつの誤あやまりと存ぞんじて候まを
へむ。事ことの儀式ぎしを。多おほ年の粉骨こなほね忠ちゆう功こうを思おも召よ捨すられ。大おほ逆無道さか無な道みち
の。高氏たかの身みありと雖なも。移うつされ候まをけるぞや。去いる元弘げんかうの始はじめ。義貞ぎぢん
不肖ふせうの身みありと雖なも。移うつされ候まをけるぞや。去いる元弘げんかうの始はじめ。義貞ぎぢん
日ひ北内きたないに亡なし。西海さいかいの宸襟しんせきを。三年さんねんの間まに休やすめ進すすらせ候まをひ
し事こと。恐おそらくハ。上古じやうこ北きた忠臣ちゆうしん小こも類るい少すくく。近日きんじつの義卒ぎそくも。皆みな功こう

を譲る処みて候ひき其後高氏が反逆駭れしより以來大
軍を靡くして其帥を虜ふし万死を出て一生を違ふと
勝て計ふるに違あらざ然れども義を重むじ命を預を一族
百六十三人節お臨んで尸をばらちを郎從八千餘人あり然れ
ども今洛中敷个度の戦ふ朝敵勢ひ盛ふおて官軍勢不利
を失ひ候事全く戦北各よ非ぞ只帝徳の關る所お候仍て
御方お参る勢の少き故うて候ハぞや詮ざる処當家累年
の忠義を樹られて京都へ還幸あるべきよて候り只義
貞を始とあて當家の氏族五十余人を御前召出さる首
を辨て伍子胥が罪お比し胸を割て比干が刑お処せられ
候べしと忿る面よ涙を流し理を辯て申けむ君も御説
りを悔させ給へる御氣色おあり供奉の人にも皆理お服
座せられぬると見えとて東宮恒良親王茂義貞お附屬て
北國お落し奉り同十日京師お還幸坐ましけるよ果して
逆臣の謀計お陥らせ給ひ天皇を花山院お押籠進らせ四
門を閉て警固を置き御供北公卿等は皆解官停止せられ

武士をば一人おぢ大名共お預けて囚人の體おてぞ置あ
りける斯て高氏ハ三種の神器多己が立進らせある光明
院お傳へ給えむ事を乞奏しけれぞ豫て造らせ置給する
偽器を御渡ししあり抑三種の神器の御事ハ初云へる如く天照大御神此皇美麻命お授け賜ひ
しまお御傳へ坐るが崇神天皇の大御代新御鏡
叙を模し造らせ給ひ勾玉と共お天津日嗣の御璽として
御代お此天皇受け傳へ給ひしよ彼の壽永此乱お安徳帝
西海お崩御らせ給ひし時勾玉と御鏡ハ掃り坐つれ
ど崇神天皇の御世北御鏡ハ海よ沈み坐ましき然れども此
後ハ書御座北御鏡を以て此お代へ給ひしを順徳天皇御
受禪の時夢想ありて伊勢より御鏡を進りしおよりて
此御鏡を宝鏡と准ぜられ三種を合せて今お至るまで天
津日嗣の御璽として御傳へ坐る
同十二月三條景繁朝臣
ハ尊しとも守き御事ありけり
の密奏お依て天皇世の有状を知召し夜お紛れて潛お花

山院を立出坐し三種の神器を奉じて吉野山へ行幸と給

ふ。太平記に主上ハ重祚の御事相違候と高氏卿様
申されたり。傷の詞を御憑み有て山門よき遷幸成り
し。押さる元來謀り進らせむ。あがりしうば。花山院の故宮
を。押さる。遠の鐘。御枕。歌。ハ。楓。橋。の。夜。北。泊。御。哀
を。添。御。涙。を。催。さ。る。北。山。の。雲。御。簾。を。掲。て。ハ。梁。園。の。昔。此
御。遊。御。涙。を。催。さ。る。紫。宸。星。を。列。補。し。百。司。の。老。臣。も。満
天。の。雲。御。涙。を。催。さ。る。紫。宸。星。を。列。補。し。百。司。の。老。臣。も。満
の。成。ぬ。ら。む。と。尋。補。召。さ。る。人。一。人。も。無。け。れ。む。天。下。の。事。い
徳。何。事。あ。れ。む。か。不。ど。不。佛。神。ふ。も。放。さ。れ。奉。り。て。逆。臣。の。席。不
思。犯。さ。る。ら。む。と。舊。業。の。程。も。浅。ま。し。く。此。世。の。中。も。憑。少。く
も。追。ハ。さ。れ。け。む。と。思。召。立。せ。給。ひ。け。る。処。ハ。刑。部。大。輔。景。繁。武。家
の。許。を。得。て。只。一。人。伺。候。と。給。ひ。け。る。処。ハ。刑。部。大。輔。景。繁。武。家
小。奏。聞。申。上。る。は。越。前。金。崎。の。合。戦。寄。手。毎。度。打。負。候。あ
候。間。加。賀。國。白。山。の。衆。徒。等。御。方。参。り。富。控。介。等。り。候。あ
是。那。多。の。城。を。攻。落。し。て。金。崎。の。後。詰。を。仕。ら。む。と。企。候。あ。る。は
是。を。聞。て。還。幸。の。時。供。奉。仕。て。京。都。へ。罷。上。り。候。ひ。し。御。池。肥

後守武重日吉加賀法眼以下皆己が國へ逃下り義兵を
舉て國中を打從へて候ある間天下の反覆遠うらじと詔
哥の説耳小満ち候急ぎ近日の間は夜小紛れて大和の方
へ臨幸成り候て吉野十津川北辺小皇居を定られ諸國へ
給旨を成下され義貞が忠心を助けられ皇統の聖化は
趣され候へがしと奉細申入とゆらる主上事此様を具
小聞召され扱て天下の武士猶帝徳を慕ふ者多うとけり
是天照大神の景繁が心よ入易らせ給ひて示さゆ者あ
りと思召されと有正斯て景繁供奉志て吉野山近く小至らせ
給へぞ吉野の大衆三百餘人楠正行和田次郎を始と志て
大和紀伊北武士ども五百騎三百騎引も切らば馳参り吉
野山小皇居を構了守護し奉べき然る小世よ吉野宮を
南朝と稱し足利の立進らせあ依君を北朝と申志て何を
を正しき大皇統ぞ思ひ惑へる徒も無き小非也此を論ひ

申さむも最イカレ可畏カレき御事小は有れど。天照大御神の詔ミコトノコトは
ま小く。天津日嗣の神寶を御傳ミツト子坐マる。吉野の大宮ぞ。正
まイカレく動き無ナき。大皇統小は御坐ミカシまふ。然れども後小南北
御和平ありて。北京の君後小松、天皇を御養君ミカシふ成ナし奉り
給ひ。三種の神寶、御讓ミツクり坐マえより後を。假令イカレ吉野の宮北
御末ミマを殘コり坐マとも。後小松、帝ぞ。正まイカレき大皇統小は坐マしけ
依ヨ。此コ水戸殿の大日本史を始め、先哲の論定せられし事
も。猶ナかの読史余論ヨシは、後醍醐帝、南山小通ミチく人の知れるが如
き。武家の輩も、又ナかくぞ有アる。されど足利氏の代ヨとあり
ても、猶ナ從トハざりし國クニく多オうゆき。然れども終マり運祚ウネソクの開

け給タえざり。志シは皆ミたれ創業の御不徳ミに依ヨて、天の與ヨし給
えぬ。あるは、されば心ある人ヒトも、北朝キョウ小仕シふる事をば
取トりしき事コト小思シひし也。然シまバ北朝キョウハ全クく足利氏の自ミら
の爲タみ。立ツ置マまラせし也。然シまバ北朝キョウハ全クく足利氏の自ミら
まバ、或シは傷キ主シ傷キ朝チョウおドも、其ノ代ノ小云ヒしとぞ見えたる。そ
北キりみ頼朝ノ卿ノ天下ノの事をハ行ハれしとぞ。猶ナ王命ノの及キぶ也
もありき。義時ノ代ノは、廢立ノの事をハ行ハれしとぞ。猶ナ王命ノの及キぶ也
あて國命ノを掌シりしとぞ。は、古ノの姿ノにシて、猶ナ王命ノの及キぶ也
醍醐帝ノの兵起サさせ給ヒし時ノも及キて、猶ナ王命ノの及キぶ也
りき。其ノ後ノ南山ノ小通ノれ給ヒて、猶ナ王命ノの及キぶ也
一ニ、天下ノ小王ノまシは、事をハ知リき。云クと云レれと。猶ナ王命ノの及キぶ也
るが如シ。此ノもシ、南ノ北ノ御和平ノの処ニ云ク、を見レば、猶ナ王命ノの及キぶ也
皇太子恒良親王、及び尊良親王、成長親王を、叡山ノを落サ給ヒ
しよ。新田の一族と共ニ。越前國小坐マしけるが。延元二年
の三月、逆徒ノ北ノ爲シ。金崎ノの城ヲ陥スりて、尊良親王は、新田義頭
等と共ニ。御自害ヲあラす。皇太子と成長親王を、擄トと成スて、都小

上り給ふるが。翌る年の四月。高氏が爲す。毒害せられ給ひ
 けり。高氏が暴逆あるハ云ふまでも無々れど。此事に至り
 去べおき心。胸せまり。髪逆どちて。畏しとも。悲しとも。云む
 氏が墓を。終夜鞭うちよりし由あるハ。実もむある。憤り
 小ぞ有。爰小鎮守府將軍顯家卿を陸奥國の守護小在。おが
 ら。數度大軍を率ゐて上洛し。皇室の御爲小逆徒と戦ひ。屢
 勲功を立られし小。今年五月。和泉國境浦よて。高師直と戦
 て討死せらま。同き閏七月義貞朝臣も。越前黒丸の戦小討
 死せらま。けれむ。今ハ新田楠の一族と。筑紫小懷良親王を
 奉じて。菊池氏あゆのみあり。然れども力足らざして。逆臣
 字誅する事能た。交。新田楠。菊池。又土居。得能の人。始終
 義を金銀小守りて。表へ坐し朝廷を助

け奉られし功績をいとも雄々。斯て延元四年八月九日
 く。忠心の臣さち小ぞ有りける。よ。後醍醐天皇吉野の行宮小坐きて。御不豫の御事あり
 けるが。次第小重らせ給ひ。同き十六日小遂小崩御らせ給
 ひせり。此とき御遺勅の趣を。太平記ハ。只生く世くの御幸
 泰平おらしめむと。思召さる。のみあり。御早世の後。第
 ハの宮を。御位小即奉り。賢士忠臣事を因。義貞義助が忠
 功を賞。子孫不義の行ひおくハ。股肱の臣として。天下
 を鎮むべし。是を思召を故。御骨を綴ひ。南山北。苔埋る
 とも。御聖ハ常小北關の天を望み給ふべし。もし命を背き
 義を軽むせば。君も繼體北君小非。臣も忠烈北臣小非。じ
 と。御遺勅ありて。左の御手。法華經を持。せ給ひ。右の御
 手小ハ。御劔を按じて。八月十六日丑刻。遂小崩御おらせ
 給ひ。御手。云くと見えて。最も雄々。御有状小ぞ坐くけ
 る。然れど左の御手。佛經を持。給へる事。佛法の盛。あり
 し時。とは云ひ。おがら。いと尊き現人神と。御坐を大御身
 を。穢させ給へるハ。畏しをも。思ひ。あき。御事あり。うし。され

どもしくは。此書作れる法師の己が道を貴げおせむとて
態と加ふる事を書記しとらむも知るほくらむとありとあり
あ。御陵を吉野山の麓藏王堂に丑寅ある。林の奥にあり。今
野村塔尾山如意輪寺あり。斯て高氏おれを聞て甚く其御事を
恐れ惶み且は其方さほの人々北心執らむめ。佛事を
營み悲しげお祭文おど作れるは。最く奸智の漢き人おぞ
有る。依。其太平記の参考も其願文を出して論せれとる
言小按尊氏弑儲反君忘恩擅逆及帝崩或建寺廢禮
或作文飾非欲以蔽人耳目可惡之甚者也所謂掩耳盜鈴彼
雖巧詐孰能信之今載之者欲使讀者知尊氏狡奸之無究耳
と見えと同十月御遺勅のほふく。第八宮義良親王吉野
の行宮小坐おて。天津日嗣知召おき。後村上天皇と稱し奉
依ハ是あり。此時皇居の守護おハ楠正行和田正朝あり。征
東將軍宗良親王を。遠江に坐し。征西將軍懐良

親王ハ筑紫の菊池に許し坐し鎮守府將軍源頼信。脇屋義
助。新田義宗。義貞の一族土居得能。三角。櫻山等の官軍お不
國にみ在于。朝廷北恢復を圖ると雖も勢ひ微おして。逆徒
ハ。ほま。強うりおと。御即位の禮も行ハれぬ。あ。三
種の神器を御拜あてしのみお。延元五年の春改元ありて。
興國元年とある。此年の三月脇屋義助を四國の大將とし
て。下向せられ。官軍大お勢を得とりし。五月お至りて。義
助朝臣卒去せられ。官軍まゝ衰おき。前大納言源親房卿を。
東國お不在。逆徒を征伐し。同二年の夏大塔宮の御子興
良親王を京師よお迎おられし。同十一月小田治久北謀
叛に依て軍敗れ。同四年終お吉野に参り給ふ。此卿の朝廷
おし事ハ皆人の知る如。同き六年義助朝臣の息義治兒島
おれば。今更に云お。

高德等潛カキふ北京キョウよ入イりて高氏を討むとせしむ。事敗マシきて
信濃シノふ走ヒりぬ。正平二年九月高氏その黨細川頭氏を將と
ちて河内國を侵オサし。同十一月。まゝ賊將細川頭氏山名時氏
等來りて攻犯セムオガしけるふ。楠正行皇居を守護ちて甚く逆徒
を討破ウチせけれぬ。高氏大く驚オドロきて。同三年正月高師直を大
將として中國四國東山東海并餘國の大軍を發ちて吉野
ふ攻來る。正行を始め其一族等ハ是を最後と思ひ定め。賊
の大軍と四條繩手ふ奮戦ちて大く賊軍を討破りけれど
も元よヒ微勢あるが上ふ。竟ツも残り少く討れなきば。正行。
弟正時和田正朝同賢秀を始め悉く討死し。賊軍進イて皇居

を侵オサせる故り。天皇を賀名生カナナマふ行幸ち給ふ。此とき賊軍ハ皇居を燒て帶

然シり此年の十月北京の君光明院御位を光嚴院第一御子興
仁親王ふ傳子給ふ。是を崇光院とぞ申ける。同き五年二月

足利直義高師直と權を争ひ。直義吉野ふ來て降を乞奉り
しふ。勅許ありて高氏を討ちめ給ふ。あの時大納言実世卿ハ誅せべきよし奏さ

れたるふ。左大臣師基公を許ちて高氏を討ちめむとの事
ありしうぞ。竟ツも其降を御許容ありし由あり。然れども前ふ
大塔宮を弑し。まゝ東宮と成良親王を毒害し奉るも。大
うと此賊が奸計より出たる趣を。読史余論ヨクシヨふ言われたる
の如し。さきむ今道ミチはく。道ミチおくちて來降せれば。幸ふ誅
戮ちて大逆の罪をも。糾ツし給ふべきふ。其降を御許容あり
しハ。何ナニふ慨カく憤イろちなき事あらや。されど此を悲しくも。
朝廷の御衰ウちより出たる御事ふて。せえて賊手を借カてか
りとも。皇威を復し給ふ。然シるふ間マちくは。賊と成りき。此

ろ高氏が兄弟叔姪、或は戦ひ或は和して、禽獸にも劣れる所爲のみありき。此を其世の書ども不委しけむは、誠見て其乱行を知るべし。正平六年八月、高氏使を吉野に奉りて、其君崇光院を廢て、天皇を京師に迎ふ奉るべき由を奏しけむと、御許容ありし。此を直義が關東に在るを討むは、官軍の其、虚を襲えむ事を恐れて、暫の奸計を欺き奉らむと爲し。同十月、高氏まゝ前の如く、使を獻りて、乞奏を依り、佯て御許容ありしうば。高氏は關東に下り、其子義詮を、崇光院及儲君直仁、親王茂廢し奉り、北京の年號觀應を止めて、正平の年號に改め、北京に百官とち、皆吉野に參らぬ。斯て主上を、高氏の偽謀を、よく知召されけむ。同七年二月、賀名生の皇居を出させ給ひて、男山に臨幸坐はし。俄

ふ右近衛、大將顯能、少將顯經、正行の弟左馬頭正儀、和田和泉守正忠等、詔を承りて、北京を攻破り、細川頼春を誅しけむ。ば、義詮驚き怖れて、近江に走りけ。斯にけれむ。北京の君、光嚴、光明、崇光の三院、及び直仁、親王を、男山に迎ふ給ひしが。後、吉野に移て、賀名生の別宮に置進らせ給ふ。前、後、醍醐天皇の假、小作らせ給ひて、光明院に御傳り有、新器も、此時に取返し參らせられ、其眞器あらぬ事を、知らせ給はむ。爲、神玺の御筥をば棄られ、宝劔と内侍所とハ、御近習の雲容に下されて、衛府の太刀、裝束の鏡もぞ成されける。然るに、逆徒まゝ大に起りて、男山を圍み攻けれむ。五月、官軍糧盡て、權、大納言隆資、中納言雅賢討死し、康長あど防戦せし間、主上を辛うぞ。吉野に還幸坐ました。同

き八月。足利義詮の計らひみて。光嚴院の御子。彌仁親王を
立て君とす。是を後光嚴院と申す。然れど此を先帝の詔宣
も無く。天津日嗣の神器も坐ざりけまじ。識者とちハ。彼此
を議し申されまうと。武家強て申行ひ々依上ふ。二條關白
良基公の説ふ。高氏を以て寶劔を替す。良基神璽を替す奉
ゆ。踐祚あらむふ。仔細あらじと申されけまじ。竟し御即位
ありし由あり。然れども。此を謂ゆる。偽朝の御事とは申あ
がら。全く良基公の。足利公詔をれとる言みて。畏くも天照
大御神の大詔違ひ。且を皇統の御亂れをも醸し奉るま
ぎ。枉言ふぞ有る依。其の園大曆。文和元年七月二日。一條
前。關白被送。消息踐祚。事所存之趣。一紙

註送被談神妙之由申畢。其次予申詞同。註載之。加一見被返
送之。其後令実夏卿清書之。加消息送遣仲房朝臣。若宮踐祚
條。何様可有沙汰哉。事傳國。礼以旧主宣命。普告天下之上。
被渡神璽鏡鏡。是為奕代。流例哉。但有別故之時。蓋以被渡神
璽神鏡不及宣命宣制。欵而壽永。旧主不御。帝都神器等在。西
海。仍被經再往之沙汰。候。太上天皇。詔宣被施行乎。爾降元弘
建武。同任彼先蹤。有其沙汰乎。而今上皇御座。外都壽永以來。
儀猶被遵行。欵云くと見えさるが如く。安徳天皇西海小坐
し時。後鳥羽天皇。神璽おくまて。御即位ありしハ。後白河天
皇の詔宣より給へる御事おこしうば。此時とハ甚く異
あり。思ひ惑ふまじうら。從良基公の事。彼斯て高氏を關
讀史余論ふ。論ひ置れまじ。今更ふ云は。從斯て高氏を關
東ふて。直義が降參せし。戎毒殺まて。事果さゆし。其時義
貞朝臣の息。義宗。義興。脇屋義治。義兵を起し。高氏と武藏
野小戰て。鎌倉をも攻破り。足利基氏を追落し。後小笛吹峠
の戦。官軍打負て。義宗を越後へ赴き。義興。義治。河村城

小籠り然る小和田楠の一族等。正平八年よ。同十六年
 までの間。三度北京を攻取り。逆徒と數度の戦ひ有。し。官軍
 小勢おれ。永く都を有。事能。正平十
 三年。高氏卒。同廿二年。小義詮卒。其子義満ま。逆威を振。爰。後村上。天皇。正平廿三年三月十一日。
 小崩御坐まし。御陵。河内。國。錦部。郡。觀心寺。後。山。小。在り。南山。要記。は。如意輪寺。と。り。正。第一。皇
 子寛成親王御即位。是を長慶天皇と申奉る。長慶天皇。御即位の。事。皇朝史略。按。新葉集。載。後。龜山。帝。御製。和歌。以。歌。意。觀。之。似。後。龜山。帝。以。是。歲。即位。且。本。書。序。以。後。醍醐。後。村。上。後。龜山。為。三。朝。不。以。長。慶。帝。列。世。數。尤。可。疑。也。然。無。他。書。可。證。今。從。三。代。記。不。輒。改。と。論。せ。れ。と。る。小。從。ふ。ほ。し。建。德。元
 年三月。北京の君。後光嚴院。御位を御子緒仁親王。小讓。給

ぶ。是を後圓融院と申。斯て文中二年。足利。義満。細川。氏春
 えて。賀名生の行宮を犯しけれ。天皇賊を吉野。避給ひ。
 此年八月。御讓位ありて。皇太弟。熙成親王御即位。後龜
 山。天皇と稱。是。是。あ。正。長慶天皇。紀伊。國。伊都。郡。玉川。宮。小。移。正。坐。して。太。上。天。皇。と。稱。し。奉。正。ける。が。崩。御。の。年。月。御。陵。も。詳。あら。は。弘。和。三。年。四。月。北。京。の。君。後。圓。融。院。御。位。成。第一。御。子。幹。仁。親。王。小。傳。へ。給。ふ。後。小。是。を。後。小。松。天。皇。と。ぞ。申。る。此。頃。天。下。の。亂。逆。極。まり。て。大。義。名。分。を。知。る。者。あ。く。朝廷。を。有。れ。ど。も。無。き。が。如。く。小。衰。子。給。ひ。楠。氏。の。一。類。あ。り。て。纒。小。守。護。せ。る。れ。み。あり。し。天。授。六。年。楠。正。儀。朝。臣。卒。去。せ。られ。弘。和。二。年。和。田。正。武。朝。臣。卒。て。皇。威。を。益。衰。へ。坐。

えた。然れども正儀朝臣の子正勝。微勢を以て屢賊軍と戦ひし。元中五年八月。義満紀伊國和歌浦を看る由。潜小皇居を覲ふ趣を聞き。正勝八百餘騎を率ゐて。其空虚を襲ひし。利を失。補氏の一族とちの代々忠義を尽され。樹る。元中九年。正勝正元兄弟千餘。城を守り居られ。ば。正勝ぬし。答へら。吾不肖。おれども。祖父正成の遺訓を守りて。世々忠義を尽せ。い。う。て。不義の富貴を貪る。ば。き。と云ひ。な。ま。ば。義満。忿。て。大軍を以て。圍み。攻。め。其。糧。道。を。絶。ち。ける。故。に。正勝。兄弟。力。を。尽。て。城。を。捨。て。十。津。川。の。辺。に。奔。り。力の。足。ら。ざる。を。歎。き。居。られ。し。其。年。の。五。月。正元。潛。り。北。京。に。入。り。義満。を。刺。む。と。せ。し。が。事。露。れ。賊。數。百。騎。を。取。籠。り。し。を。正元。奮。戦。し。て。多。く。の。敵。を。殺。し。力。疲。れ。て。捕。へ。ら。る。義満。ま。と。降。参。を。勸。め。け。れ。ど。正元。涙。を。流。し。吾。ら。不。肖。も。あ。て。皇室。の。衰。ふ。る。を。扶。け。奉。る。と。能。は。ず。其。罪。死。せ。と。も。餘。り。あ。り。然。る。に。復。讐。の。志。を。も。遂。げ。死。し。て。憤。を。身。後。に。

遺をばしと。答へら。ま。ば。賊。竟。り。是。を。殺。せ。る。よ。し。見。え。て。其。世。に。祖。訓。を。守。り。て。忠。義。を。尽。さ。れ。し。は。最。も。哀。れ。み。健。く。雄。雄。あ。き。眞。心。の。人。等。に。ぞ。有。ら。る。世。の。士。に。あ。か。く。て。元。中。九。年。十。月。大。内。侍。義。弘。と。義。満。の。弟。佐。々。木。六。角。滿。高。の。議。ら。ひ。ふ。て。南。北。御。和。睦。の。事。を。北。京。よ。り。請。ひ。奏。さ。れ。ら。し。然。る。は。北。京。の。君。後。小。松。院。に。御。讓。位。あ。り。て。後。龜。山。天。皇。の。皇。子。を。後。小。松。帝。の。太。子。に。立。進。ら。せ。前。に。北。條。時。宗。が。定。免。奉。れ。る。時。此。如。く。持。明。院。殿。大。覺。寺。殿。の。御。兩。流。代。り。く。御。世。知。召。さ。依。依。し。の。御。事。あ。り。け。ば。御。許。容。あ。り。て。十。月。十。八。日。後。龜。山。天。皇。賀。名。生。の。行。宮。を。出。發。せ。給。ひ。て。閏。十。月。二。日。京。師。小。還。幸。坐。ま。し。同。五。日。御。讓。位。の。御。事。あ。り。て。三。種。の。神。器。を。

後小松天皇小傳子奉り給ひ。後龜山天皇ふは。太上天皇の

尊號を進らせ。嵯峨の大覺寺殿に御坐しけり。白の青天

書ふ。神宝御座記を引て。元中九年閏十二月。主上御入洛。是を去。頃より御和睦の事。大内義弘。佐々木滿高。議して。室町へも達し。獻慮をも繕ひ。なるとぞ。其御難ひ。行幸の例。よ任せて。御供仕る。修きよし。聞えし程。今か。ける。然る。修らざとて。禁中より勅使を遣はさる。室町よ。ごも。細川。畠山。山名以下。嵯峨。ふ向ひて。此。由を奏し。けま。ご。主上。仰出。さる。ハ。傳國の聖と。あて。三種の神器を。授け。進らせ。幹仁。親王を。御養君。よ。あし。奉。正。一統。北。化を。あ。き。坐を。べき。故。ふ。と。そ。遙。く。と。此。処。まで。行。幸。あり。し。今。獻。慮。の。外。ある。御。使。あ。そ。驚。き。思。召。な。れ。と。て。武。家。へ。も。あ。う。く。北。よ。し。仰。下。され。る。程。よ。重。補。て。違。乱。よ。及。び。嵯。峨。京。都。の。間。急。を。告。る。人。馬。行。う。ふ。さ。は。更。ふ。め。ご。ま。し。滿。高。や。が。て。室。町。の。館。よ。参。り。て。申。る。は。南。方。の。仰。御。利。運。至。極。せ。り。神。器。渡。御。お。き。不。ど。ハ。南。方。當。今。ふ。て。坐。ま。は。御。事。已。く。加。さ。お。き。上。ハ。急。ぎ。和。を。謀。り。て。ぜ。さ。せ。給。ふ。べ。き。と。そ。太。平。の。御。基。ある。ば。し。と。諫。め。申。け。れ。む。室。町。殿。げ。ふ。も。と。諾。し。給。ひ。て。然。ら。ば。汝。参。り。て。と。も。加。く。

も。擗。へ。奉。れ。と。仰。る。不。ど。滿。高。嵯。峨。よ。参。り。て。室。町。殿。の。旨。を。奏。し。行。幸。の。御。粧。獻。慮。の。ま。く。不。諸。家。供。奉。し。奉。る。べき。由。啓。し。け。ま。ば。主。上。斜。あ。ら。む。獻。慮。あり。て。事。静。まり。お。け。て。去。不。ど。お。同。五。日。ハ。三。種。の。神。器。を。禁。裡。へ。渡。し。奉。ら。る。南。方。の。公。卿。六。人。御。辛。櫃。の。前。後。よ。供。奉。し。奉。り。都。より。御。迎。の。公。卿。二。十。一。人。並。ぶ。守。護。の。武。士。ふ。ハ。備。中。守。滿。高。参。り。て。迎。り。奉。り。京。中。の。貴。賤。街。お。拜。み。奉。り。ける。実。よ。五。十。余。年。の。春。林。を。南。山。北。雲。よ。る。ど。て。坐。ま。し。ける。今。年。正。え。く。帰。り。入。ら。せ。給。ひ。な。る。嵯。峨。へ。ハ。や。が。て。太。上。天。皇。の。尊。号。を。授。け。奉。ら。せ。給。ひ。き。十。一。月。四。日。太。上。天。皇。禁。裡。へ。御。幸。坐。ま。し。な。れ。む。さ。ま。の。御。遊。あり。て。武。家。よ。り。御。料。を。渡。し。奉。り。南。方。伺。公。の。公。卿。も。顯。官。元。の。如。く。ある。べき。よし。宣。下。あり。け。ま。ば。上。下。一。時。よ。眉。目。字。閑。き。都。鄙。万。歳。の。賀。儀。を。遂。て。一。統。の。御。代。よ。帰。らせ。給。ふ。を。悦。び。奉。り。け。て。さ。れ。む。光。嚴。院。よ。て。此。の。御。と。五。主。渡。らせ。坐。ま。し。ける。も。潤。統。の。君。と。や。申。奉。る。べき。と。ぞ。聞。え。し。可。彦。謹。て。思。へ。ら。く。太。上。後。龜。山。天。皇。恢。復。の。謀。つ。きて。比。狩。志。給。へ。ど。も。強。暴。よ。屈。し。給。む。父。と。あり。子。と。あ。し。て。神。器。を。傳。り。給。ふ。と。名。正。え。く。分。明。ら。う。れ。む。武。臣。滿。高。身。權。勢。お。據。れ。ど。も。威。武。よ。悖。ら。ば。義。を。明。し。主。を。諫。め。事。を。定。め。二。君。を。安。む。じ。て。天。下。の。太。平。を。成。せ。り。嗚。呼。時。ある。

○玉多須伎二之卷

○四十

哉。臣ある哉。と云方るを、然れを後醍醐天皇の延元元年
 八月。足利高氏が計らひふて。光明院を立て。北京ふ帝と稱
 せるよ。五十七年ふあて。御一統あ。常石ふ堅石。皇統
 の御榮え坐せるは。天照大御神の大御心ある。最も尊
 き御事ふぞ有ける。はれど此を大凡満高が功とも云。はく。
 少う足利の逆罪を贖ふも足る。はくや。然るふ義満將軍
 此暴戻僭上を。忌む。あとも畏おしとも。最く亂めある事と
 もふて。朝恩の深きを。も思を。西戎國の酋。媚て。彼が云
 ふ。任せ。自ら日本國王と稱し。重き逆罪を犯。皇國ふ
 萬世の臭名。残しも貽され。と。軍。皇朝へ忠。あら。此。將

更にも云。専ら皇國を西戎國の奴。あして。末の代。往
 きて。甚じき恥を。残し。給へる。天地分れて。のち。來し。う。と。往
 さき。比ひ。あき。事あり。か。る。甚じき。非。事。あて。取。あ。し。と。も
 思。を。ざり。け。む。は。思。あ。ゆ。と。も。出。あ。と。も。云。を。む。う。と。ぞ。無。り
 ける。云。近。世。東。照。神。御。祖。命。よ。り。以。來。御。世。の。大。將
 軍。へ。朝。鮮。國。王。が。奉。る。書。小。も。日。本。國。王。と。申。奉。る。事。を。ば。此
 方。よ。止。え。させ。給。ひ。又。其。國。王。子。賜。ふ。御。書。ふ。も。然。を。書。せ
 給。ひ。給。御。事。よ。天。皇。を。憚。り。奉。り。給。ふ。御。義。理。の。有。り。と。た。の
 こ。あ。ら。ば。御。國。の。尊。さ。を。墜。し。給。ひ。給。御。計。ら。ひ。免。て。と。い。と
 も。め。て。さ。し。然。る。を。太。宰。純。あ。ど。が。今。の。世。大。將。軍。と。申。を。い。
 名。正。し。加。ら。ば。當。ら。ぬ。事。と。申。せ。る。は。甚。じ。き。私。言。あ。て。征。夷。
 大。將。軍。と。申。を。い。正。しく。皇。朝。よ。り。仕。し。給。へ。る。御。職。よ。く。天
 の。下。あ。も。が。下。ま。で。も。明。ら。う。小。仰。ぎ。奉。る。御。号。あ。る。物。を。當
 ら。ぬ。事。と。は。最。も。畏。く。中。く。よ。名。を。乱。る。事。あ。れ。よ。り。甚。じ。き
 有。ら。じ。と。ぞ。思。ふ。を。べ。て。儒。者。を。あ。げ。西。戎。の。例。を。の。み。思
 ひ。て。大。御。國。の。大。義。を。ば。思。ひ。給。ふ。故。に。辨。言。を。有。る。れ
 ゆ。云。く。と。論。は。れ。さ。る。が。如。く。猶。ま。さ。此。人。薨。後。ふ。太。上天
 委。し。く。い。本。書。ふ。就。て。見。る。は。猶。ま。さ。此。人。薨。後。ふ。太。上天
 皇。の。尊。號。を。宣。下。あり。し。ふ。其。子。義。持。將。軍。甚。く。恐。れ。畏。み。て。

辭し奉れる由あり。かの青天白日と云、書み、此事を記さず。應永十五年五月五日の事にて、公深く
懇望ありて、諷奏ありし、うばやむ事を得ば、朝廷も宣下あり
去由、或家の記み見え、畠山、基國、細川、頼元、誅て、辭せしむる
事、龍川、吹毛居士が記み見えと云く、とあり、その懇望せ
し由の、実みさも有、けむと思えり。此、人太政大臣お仕
ぜられむ事を懇願せし時、清盛の外も、武家相國お仕
の例おなれど、いふと朝議ありし、義満怒て、自ら國王
と成て、細川、畠山等を、攝家清花に准せむと云ひし、うば朝
廷甚く恐れ給ひて、御許容ありし由見え、まよと淳和、并學兩
院、別當源氏、長者を、世く久我家の職ありし、義満將軍よ
り後、武家此職お任せらる。然れど、尊号を懇望せし由お
るは、実お然ありし。然れむ義満將軍の惡逆を、高氏も過
おるは、實お然ありし。然れむ義満將軍の惡逆を、高氏も過
て、憎むも餘りある事ありけり。おれらの事ども、委く言
はま欲けきと、煩はなき
省故、斯て南北御和睦、御一統の御事ありて、後も、吉野の
朝廷お世く仕子奉りし人等ハ、猶忠義の志を守りて、其御

方お皇子ごちを止め奉り。吉野の邊お潜お仕子奉りて、暫
く世の形勢を伺ひ居ありける。凡て南朝の御事お就て
る事ども、思ひよれる事ども、書と免置さる物多り。此、前
後云へるは、則その大略あり、又南北御一統の後も、吉野
の辺り事ありし趣い、近ごろ伴、信友、諸書を参考して、委く
記せる物あり。故これをも取合せて、お布次くも記をを
見し。足利氏を、まよく、怒お逆威を振ひて、後龜山、太上天
皇の皇子お御讓位の御事をも計らひ奉らば、吉野の御方
は、武士等をも、仇敵お如くおせし、うは、益淡く憤り居
時しも、義満の子、義持將軍の計らひふて、應永十九年八月
廿九日、御契約お違ひて、後小松、天皇の皇子、躬仁親王お御
讓位あり。是を稱光、天皇と申ひ。然るお同三十一年四月十

二日ふ。後龜山、太上天皇崩御坐ままし。御殿に、嵯峨の正長元

年七月廿日。稱光天皇崩御坐まはちて。皇子も坐まざりけむ。

今は後龜山、天皇第二の皇子。小倉宮う。又を其御子おどま

そ。御位を繼つせ給ふまきふ。又しも義持將軍の計らひふて。

伏見宮貞成親王。此に榮仁親王第一の御子。彦仁、王御即位

あて。後花園、天皇と稱なまは是あて。伏見宮の御家傳に、榮仁

末子ふて。後村上天皇の末子。楠正儀敗軍の時、御和睦北事

南朝より仰入れ、其證として、此皇子を送らせ給ひし由

あて。實不然らば、今の天皇命ハ、後ス有けれむ。小倉宮淡く

醍醐、天皇の御血統ふぞ坐くける。憤り思召し、御子尊義、王と共に伊勢國司北畠、滿雅朝臣と

謀かて、軍を起し給ひしうと。滿雅朝臣討死せられしうば。

力あく御和睦ありて。御父子再び嵯峨か歸らせ給ひ。此と

倉宮を、御飾をおろして、萬壽寺き小。其御方の武士等を、望を失

ひ。ままいく憤り淡くぞ成ておける。此、頃其方さまの人、

中小も楠氏の一族を、殊に祖訓を守られし事と見えて、永

享元年の後崇光院御記。九月十八日の條に、楠五郎左衛門

尉光正、召捕られ、首を刎らる云々。此に義教將軍の春日

参詣を伺ひて、討とむとせしふ露頭て捕りられし由れ也。

嘉吉三年、楠次郎某。大和の越智某等が始末。吉野、十津川、河

内紀伊國の者どもを談らひ。小倉宮第二の御子尊義、王を

太上天皇と尊稱し。其御子尊秀、王を南方宮と稱し、舊の南

朝の皇統を復し奉らむとし。日野一位入道有光卿も京にお

在て、潛り示し、合せ給ひ。軍兵三百人ばうゆ。九月廿三日の

夜ふ。内裡オレヨに襲寄せ。西門よド打入りて火を放ち。思ふ儘ふ
振舞フルモビるる。其兵の中より。長刀を打振りて。主上オノノミに近附奉
る者ありける。忽タチマに眼闇みて倒れける所へ。親長季實と
云者。御前オノマタに立塞り。太刀を抜て敵を切拂ひ防ぎける間ふ。
主上ハ御冠を脱せ給ひ。女房の姿カタふて。御徒オノタテより。忍びて逃
れ出させ給ひけり。然るシカに。此時主上は御心疾く。御自ら寶
劔を錦の袋より取出し。鞘卷繪サヤマキエの御太刀オノタテ比布の袋フクロに入替
て。持せ給ひ錦の袋オノタテふハ。鞘卷繪サヤマキエ比御太刀オノタテを入れて。態と殘
志オカ置せ給ひ。典侍オノシハ。神璽と殘し置せ給ひ。御太刀と拔取
持て。遁れ出るを。寄手見ヨセテミか々て。共オノに奪ひ取り。はと内侍所

をも奪オノひとり奉り。清凉殿オノに火を放ちてぞ退きける。此時
内裏警固の武士ども。追オノくよ馳參オノり。退く敵を追討ふ。五
十三人討取り。内侍所を取返し奉り。惣寄手オノを比叡山オノに登
り。中堂オノに居て。僧徒を談オノらひけれども。僧徒オノら更オノに從オノむ。
却て京方の軍兵と共に攻めれば。同廿五日。中堂を攻落さ
れて。日野有光オノ。柳オノ。楠越智等を始め。或ハ討れ。又オノに自害オノした。
尊義王オノも失オノれ給ひけり。然れども。殘黨オノら。尊秀王オノを守護
し。神璽オノを奉りて。大和を指オノて落行ぬ。はて鞘卷繪の御太刀
をば。眞オノあら惣事をや知オノりけむ。清水寺の堂中オノに書付オノを
添オノてぞ。殘しけ依オノ斯オノて南方の者ども。大和國へ引退オノき。吉野

邊の者どもを謀りて尊秀王を神璽を奉り。私天子と稱
えて吉野の山奥ある。大河内と云、處に御在所を構て。仕
牙奉り。はと尊義王第二の御子。忠義王と申を。河野谷と云
ふ山中を御在所とえて。大河内より河野谷へは山中八河
里ばかりあり。隔るる處ありとぞ。河
野宮と稱して守護し奉り。はと私年號を立て。天靖元年
とぞ稱しける。まは後村上、天皇第六皇子。説成親王の御子。
ふ前、圓満院門主。大僧正。圓悟法王と申を。
文安元年遷俗。えて。義有王と名のり給ひ。尊秀王を助けて
大和河内和泉の浪人等を集めて。吉野の山奥に據きとる。
紀伊國牟婁郡北山と云、処に坐ましける。御旗を擧て。同
國八幡城に籠り給ふ。武家此よしを聞て。大く驚き。管領島
山持國入道。紀伊の國人らふ。八幡城を攻させたる。城強
く。あて寄手利を失ひ。重祚て細川出羽守を加へて。勵しく
攻められ。兵ども防ぐに堪ず。其城を棄て。同國湯淺城にぞ
籠り給ひぬ。同三年九月。はと其城を攻められども。城方強

く。同四年寄手重祚て兵を集め。力を尽して攻めしむ。十二
月廿二日。城竟に陥て。捕り弟の二郎を始め。數多の兵討死
し。義有王も失せ。爰に赤松滿祐の一族家人等の殘黨相議り。
何れ給ひき。
何れもえて。南方の宮を討參らせ。神璽を取返して。嘉吉の
罪を贖ひ。再赤松北家を興さばやと云。合せて。中小も中村
彈正忠貞友。石見太郎左衛門尉を云。者專ら此事を議らひ。
密に三條内大臣實量公に就て。愁訴申けれ。勅許ありし
上。綸旨を下され。武家より。内書と云。物を添て賜ひぬ
れ。康正二年十二月廿日。赤松が一族家人等。吉野に參り。
偽て兩宮へ奉公を請奉るよし申ぬ。始めは御許容あ
かりける。はまぐ。不欺き拵へ。やく御許容ありければ。

時を待伺ひて。長祿元年十二月。山中雪淡く。宮の御急めを伺ひ。同二日の夜。一手は大河内の御在所へ参り。密に御殿より忍入りて。丹生屋帯刀左衛門尉。同第四郎左衛門尉と云。者。尊秀王を害し奉り。中村彈正忠を云。者。御頭を賜て。神璽を取奉りて。引退く處を。此宮の伺候人を始め。吉野十八郷の者ども起り立ち。伯母谷と云。處。小追詰て。丹生屋兄弟。中村彈正忠。同太郎四郎等。多討殺去。此時宮に伺候人。井口太郎左衛門と云。者。心速く計らひて。神璽を取返し奉り。尊秀王の御頭をも取返しぬ。偕ま。河野谷へ向ひ。と。一。手も。同く忍入りて。間嶋彦太郎と云。者。忠義王を捕り奉り。上月

左近將監と云。者。御頭を賜りて。引退く處を。宮方の者ども出合て。寄手八人討取りぬ。宮方。不は。伺候人。宇野。大和守を。始め。四人討死せり。今吉野の山中高原村。高峯山。福源寺。古碑二ありて。一。小。一。宮。自天親王。一。小。二。宮。忠義大禪定門。と。誌。ある。在。と。其。後。南。方。宮。方。ぞ。兩。宮。の。御。墓。よ。ぞ。ある。ほ。き。と。見。え。と。り。其後南方宮方の者ども。猶も思ひ弱。事。あ。く。楠。正。理。ら。尊。義。王。第。三。の。御。子。尊。雅。王。を。取。立。神。璽。を。上。り。て。潛。小。大。和。の。十。津。川。小。坐。し。ける。が。明。る。長。祿。二。年。の。六。月。吉。野。の。山。奥。小。御。在。所。を。構。り。て。遷。し。參。ら。せ。け。り。爰。小。赤。松。の。黨。小。小。寺。藤。兵。衛。入。道。性。説。と。云。者。大。和。の。國。内。小。在。る。が。國。人。越。智。某。小。河。中。務。少。輔。お。と。云。者。と。議。り。て。間。嶋。衣。笠。等。と。共。し。其。宮。の。御。在。所。を。襲。

然らば義満義持の盟約も違ハむ。南朝旧臣の憤りも散
じ。且て建武以來八十余年の間。戦死せし南朝義士の忠魂
宛魄をも慰しつゞし。豈忠厚の至りふ非ざらむや。然るも
腹あしく。南帝の統を絶棄参らせし事あるや。うとてけき。云
云と論ひ。まゝ義満義持義教等の南帝を欺き参らせし事
も三種の神器を奪ふはまき。爲ふれむ。穿窬の盜れ如し。と
も云べきふや。と云われ。ハ。顯幽。然れど元中九年。南北
ふこさめて。いせ正しき説あり。御一統の後。御契約比如く。御兩流代る。天津日嗣。志召し給は。吉野の御方ふは。御遺憾あき。如くあれど。
又し母終ふハ。皇統北御争ひも。無しとは申奉り難し。然る
ふ恐ぬも。吉野宮の皇統ハ。絶果まゝて。かく御一統ふ成り
坐し御事を。於らく。思ひ奉るふ。是ぞ禍神の荒び。よて。北
條が時よ。御亂れの出来。と。天照大御神。直日神の

御靈幸ひて。堅石常石ふ。動きあき皇統ふ。あし定め奉。給
牙る御事ある。最も尊ぶ神量ふ。あむ有る。依。此初ふ
合せ考。ちて足利氏の世を司。十三代二百三十餘年
け間を。天下一日も平穩ある事。其を説史余論。高氏
直義を毒殺せられ。義詮を其庶兄直冬。其同母の弟基氏と
不快。直冬ま。父と弟と。向ひ合戦。義持義嗣を殺
し。義教。義昭を殺し。持氏父子をも殺。我身ま。逆臣の
爲。弑せらる。義政。義親。兄弟不快。よて。義植。義澄。兄弟不
て。世を争ひ。義晴。義榮。再從兄弟。又争ふ。是み。人倫の
理。あき。似たり。云くと云われ。猶その陪臣。さる者。の。世を
乱ゆ。と。正し。趣をも。い。其末世の頃。成りては。天下亂れ。事
亂きて。朝廷の御衰微。實。數。出るも。心痛み。涙流。事
事ども。内裡を損。ハ。諸國の貢物。も。は。と。志

うら祢む。修理ひ給ふ事能て。爰畏くも本願寺よ。即位の料を獻じ。内裡をも修理し奉れる時。も有しと云ひ傳ふるは。甚も悲く。忌はしき事。ふぞ有る。玉銚百首。天の下常夜もく。あは足利の末。北亂れの亂き世。やくし。詠れしは。此時の事。あり。抑かく。依亂きともは。大皇國の御國體を忘れて。漢風の驕奢と。餘り。佛法を執をやし給ひて。神事。戎鹿略。ふおされ。神祇を汚し奉る事。の多加。正し故あり。是を以て。佛法の始めて渡れる時。ふ。物部中臣の臣等の。其子拒みて。我が朝を。恆ふ。天神地祇百八十神。祀を爲し給ふ事ある。ふ。改て。蕃神を拜せば。恐くは國神の怒めを致さむと。

ぞ奏され。依何ふよく。神祇北情狀を。曉り得られし。物識と。ち。非。爰や。大。う。中。世。より。儒者。故。実。者。哥。作。あ。どの。少。れ。ど。実。小。ハ。然。る。倫。を。事。識。小。お。そ。有。れ。物。識。小。ハ。非。ど。古。意。を。も。て。云。と。き。は。神。祇。の。情。態。を。思。ひ。を。澤。め。て。其。神。隨。あ。る。道。を。知。れ。る。人。を。物。識。と。は。云。り。委。く。果。志。て。其。諫。め。奏。さ。ハ。古。史。傳。よ。説。さ。る。を。見。て。知。る。儘。し。果。志。て。其。諫。め。奏。さ。れ。し。語。ど。も。れ。如。く。彼。穢。き。事。戎。惡。ひ。給。ふ。八。十。枉。津。日。神。あ。も。御。怒。あ。り。て。荒。び。坐。ひ。ふ。所。得。さ。る。妖。神。ど。も。枉。事。志。お。く。然。る。禍。事。ど。も。北。出。來。し。お。正。然。れ。む。光。仁。天。皇。寶。龜。七。年。四。月。乙。巳。の。大。御。詔。ふ。祭。祀。神。祇。國。之。大。典。若。不。誠。敬。何。以。致。福。如。聞。諸。社。不。修。人。畜。損。穢。春。秋。之。祀。亦。多。怠。慢。因。茲。嘉。祥。弗。降。災。異。荐。臻。言。念。於。斯。情。深。慙。惕。宜。仰。諸。國。莫。令。更。然。云。は。と。

陽成天皇北。光孝天皇小。大御位を讓り坐る時の宣命小云
云食國乃政乎末遠聞食倍喜御病時く發止有万機滯止
久成并シテアリ天神地祇之祭モヒコ息止有加危美畏利念天支天天皇
位讓遜給ツギ別宮ユヅリ還御坐天宣云くを見て最も尊く
有がとま大御詔小ぞ有る。世の庸人ら神とし云へば他
奉れ依者の多きといと不審なき事北極みありけり
謂ゆる源平藤橘の四姓を始め親より親を逆上り算ふれ
ぞ神を則祖不て餘不祖とせべき物を齋き拜みて神をば祖と
縁もあき外國の卑き佛ちふ物を齋き拜みて神をば祖と
も思ひ奉らば死してハ其道の妖魅とありて長く祖神の
御罰を蒙るべき事をも知らざりて惜ら年月を過せるハ最
哀れある事小非ぢや此を此書の然る小足利の末世その
閑卷小も云へるを合せ考ふべし。

秀吉公とも小尾張國より勃興して、まが朝廷を尊崇し奉
り。その御衰微を立直し。世の亂れを治め。叡山根來の惡僧
徒を盡ふして、其兵器戎も焼亡し。爾後北凶逆を止免られ
しは、最も大じき功績ありけり。説史余論小、白河院の御詔
の寨と山法師と仰られしとぞ。山僧のみう非ぢ。三井寺興
福寺の僧徒らも。動もなきば。兵革を動かして。朝威を蔑如
ふし。應仁の亂北後也。山僧を云ふ及む。法華一向の徒。高
野根來北僧も。兵威を振ふるを。信長の代。叡山の兵器を
焼き根來寺を焼亡せし。數百年の禍を除けしは。其功尤
大。おと云はし。あ。一向の宗。今其禍根と元也。後世
ま。國の憂をさむ者。此。北。残れり。と記さぬ。師の玉
銚百首小も。倭文機を織田の命を朝廷。辺を拂ひ静めて功
あき大臣。ま。服。國の神とも詠れり。服。抑信長公北朝廷
を尊崇し。世の衰廢を興復せらむしは。專ら正親町天皇の。

大詔ふぞ依れどける。其れ此、天皇の永祿五年十月、斐田宮
お詔して、世の乱逆を讒めよとて、御衣と奇香とを賜ひし
くば、信長公謹で勅字奉じ給へる由、国史界に見えとて、其
れを畏れど、斐田大神の神樂と坐せ、天、雲、御劔の御靈幸
ひふて、信長公よ、世の乱れを、操ひ鎮めさせ給へる御事お
はべく、最も尊く、忝き御事
とぞ思ひ奉らば、
けて此、時を、前ふ論、子依如く、天
下逆亂の極みあり、皇居も荒果て、有る無る、北御有
状ありし。西戎人も云、如く、尺土も天皇の御有、非ざ
る、當時、諸國の大名とち、少うも君臣の道を辨へ、一人
も天下を治めて、宸襟を安むじ奉るべき事を、思は、一人
暴威を振ひて、天皇の御土地を掠れ取り、我、物兒、君ごう
ひ居る、ハ、叛逆、等、事ある、ま、そ、多、上、れ、き、大、罪、と、し、も、思
え、さ、依、る、い、う、お、ぞ、や、抑、兵、は、逆、乱、を、治、む、る、道、具、あ、る、ま、其
事を思は、私、の、戦、争、を、為、て、暴、悪、我、運、ま、く、ま、る、を、叛、逆、ふ
非、交、して、何、ぞ、中、ふ、も、上、杉、謙、信、武、田、信、玄、ら、頭、を、問、え、さ、る
を、殊、勝、が、み、見、ゆ、れ、ど、も、教、伐、を、専、お、せ、る、は、何、事、ぞ、不、法、の

甚しき者、お非交や、謙信も、少う見る所、れ、き、り、非、交、と、い、ふ
ども、擬僧ら、何の仕出しある事、の有、依、然、る、を、世、の、兵、学、家
を、稱、む、る、者、ど、も、其、を、祖、師、北、如、く、尊、奉、を、あ、も、多、う、る、い、傍
痛、き、事、お、こ、そ、但、し、中、古、以、來、擬、僧、ら、の、悪、行、を、大、抵、推、並、て
の、事、お、有、れ、ど、此、二、人、は、信、を、る、愚、人、ら、の、多、き、の、故、お、云
あり、我、が、黨、の、小、子、兵、学、の、真、旨、を、知、ら、む、と、思、は、し、予、が、武
學、本、論、の、出、る、
を、待、て、見、ば、し、
信、長、公、ま、だ、大、お、皇、宮、を、造、營、を、給、ひ、亂、世、の
中、お、ぐ、ら、金、子、を、都、民、お、貸、て、其、息、我、經、費、お、供、子、ら、れ、廷、臣
等、も、窮、迫、ま、て、粥、を、食、し、給、ひ、し、程、お、ど、し、よ、此、公、其、采、田、を
檢、あ、て、人、お、賣、る、者、を、價、を、償、て、其、舊、お、復、し、は、二、條、の、城
趾、を、賜、ひ、し、お、も、自、ら、は、住、せ、ら、れ、ま、其、處、お、宮、室、を、營、み、て、
皇、太、子、お、獻、ら、れ、
ま、ま、義、昭、を、諫、め、ら、れ、し、十、七、條、の、第、一、お、
御、参、内、の、儀、光、源、院、殿、等、無、沙、汰、お、つ、き、果
て、御、冥、加、お、き、次、第、お、候、是、お、依、て、當、御、代、年、お、懈、怠、お、ま
や、う、お、と、御、入、洛、の、刻、よ、お、申、上、候、處、お、は、や、思、召、忘、ら、れ、近

年御退轉。物躰モノカラおく存。候事と載されど。猶まゝ伊勢の兩宮は。天武天皇より
 此、うゝ。廿年ニニふ一度ヒトお。造進せらゆ。御事あるふ。兵亂の
 爲タメふ。皇室と共に。數百年衰廢せしを。信長公奏請ウケマシて。男山北
 八幡宮と共に造營せられ。まゝ武田勝頼を滅ホトして。歸陣せ
 らる。時トキに。熱田宮アツタふ賽カキ志シて。其宮を修造せられ。天正六年
 正月。始ハジて。節會セツエを行われし時トキも。朝儀廢絶せしを。此公慶典
 を起して。執行キウギひ給ひしおど。人みお感歎せ志由ユお。猶ナま
田勝家を。越前の守護せ。せられし時。廷臣の邑。乱賊の爲
ふ。掠めらる。物。印券。扱て。還付。せ。命。せられ。き。
 志シて。此公は。小義コガミを拘カわらば。専セン尔ニ大義ダイガミを勤ツツえて。はづ天
 下タふ皇室カミ北キタ尊タタきを。知ら志シを給へ。最イも太ヒじき功績イサナあら

げや。當トキ時トキ朝廷テイテイの御衰微ミチノシヅメも。供御キヨミふさへ。御事ミコトを缺カせ給ひし
 り。不フどの事コトある。世ヨに。此公コノミコトの御坐ミカを。知れる者モノも。少シく
 を。與ヨされし。は。乱ミ世ヨに。取トりて。容ヨ易ク加カらぬ事コトある。ふ。加カく世
 を。大オホ功コトを。残ノコされし。は。最トモく。尊タタき事コトありけ。ま。此公コノミコト。鬼オニ門カド
 を。攻ウむと。せら。し。時トキ。あ。の。山ヤマも。僧ソウ徒トの。奸ヤ計ケを。て。王オウ城シヨウの。鬼オニ門カド
 を。護ゴ依イせ。う。云イひ。來キつ。る。故コも。諸シヨ將シヨウ疑ギ懼クを。抱ウきて。進シムま。ざ
 り。し。よ。信シ長チヤウ公コウ。我ガ。勤ツツ王オウの。師シを。唱ナへ。風フウ小コ纏マと。露ロも。沐シて。虚ソコ
 日ヒお。し。僧ソウら。律リツを。破ヤり。政セイを。乱ミる。是コト。國クニ賊ソクも。あ。て。私シの。警ケイも。非ヒ
 ぞ。今イマ。誅シツ夷イせ。む。む。後ノチ世ヨ。天下テンカの。患ウヅを。貽ヒさ。む。と。宣ノボへ。る。小コて。
 此公コノミコトの本意ホンイを。察サツる。ふ。足タまり。此コノ。然シカる。ふ。新ニ井イ君キミ美ミ怒ドと。此
 諸書シヨを。記キせる。を。見ミて。知チる。べし。然シカる。ふ。新ニ井イ君キミ美ミ怒ドと。此
 論ロンふ。此公コノミコトの義昭ギシヨウを。諫ケンえられし。は。義昭ギシヨウの。爲タメふ。忠チユウを。盡ツツさ。ま
 志事シとは。見ミえ。ば。義昭ギシヨウの。惡アクを。世ヨに。頭アツを。さ。む。との。計ケを。見ミゆ
 と。云イひ。は。と。三サン好コウ松ソウ永エイグ。輩ハイを。速スに。誅シツ戮リツせられ。ば。ゆ。し。事コトあ
 ぞ。何ナニくれ。を。論ロンれ。ま。ま。と。み。あ。小コ義ギふ。泥ドロみて。大ダイ義ギを。思シは。ざ

依の説也。其は當時天下の逆亂極りて。大義名分を知る者なく。皇室の尊きを忘ゆ。程おれむ。況てや私の主従の義理おどは。論ふべき所お非也。然まばま。於至尊と御坐坐。天皇北御上を。世り知らぬ。おむ。其下の主従たる義理も。自ら明白に成ぬ。是を以て此公は。於根本お依勤王の事を第一お行をれし。お。是重き大義おハ叶ひてぞ有。依此を畏き事おぐら。東照神御祖命の大坂の亂徒を滅して。ま。於宸襟を休め奉り給ひ。後お學問北道を起えて。天下お大道を知。お給。御事と合せ思ふ。依。

報氏の史。昔周世宗以英明之責。而抱混一之志。不率衆言。厲精進取。雖半途而沒。而能開趙宋之業。右府之迹。蓋似之矣。而豊臣

氏。以右府將校。繼其成緒。能就其志。而至於尊王之義。經世四

中おも。天皇を聚樂。第一行幸おし奉。御前お諸大名を召集。共お皇恩を奉戴し。力お王事お竭。お。怠るは。お。由

成盟ハせ給ひ。

世お秀吉公を皇座にて。実を卑賤の座にて。

岩垣ぬしの國史。畧お松永貞徳の戴恩記を引て。豊太閤嘗て朝服を關下の施薬院に著け給ひし時。お。天顔を拜するお感激して。人お語り給ひける。お。余お母おむ。お。朝家式微の時。お當り。後宮お事へ奉り。お。龍躰お近づきて。身める事あり。出て尾張人お嫁して。余を生るお。お。松苗。お。云。お。而るお。當時。其。実を宣ハざりしは。朝廷お。憚り給へる。お。其。礼あり。施薬院の一語。お。お。ま。お。感激。其。布喜悅の餘り。お。出。其。実を泄。お。のみ。云。お。と見え。お。

ろ此公を皇國內のみ非也。西戎國までも稜威を輝し給
 ひて。我が皇朝北尊きを知らぬめむとぞ。思されけ候。太閤
 記。對明使可告報之條目とありて。其第一條。夫日本者
 神國也。即天帝。天帝即神也。全無差。依之國俗。風度崇。王法。赫
 天。則地有言。有令。雖然。風移俗易。輕朝命。英雄爭權。隣國分崩
 矣。予之慈母。懷胎之初。夢日輪入胎中。覺後。驚愕。而即相士ト
 之。曰。天無二日。德應弥四海之嘉瑞也。故及壯年。夙夜憂世。愁
 國再會復。聖明於神代。遺威名於萬世。思之不止。終經十有一
 年。族滅凶徒。毒黨而攻城。無不拔。敵陳無不虞。有乖心者。自消
 亡矣。已而國富家娛。民得其所。而心之所念。無不遂。非予力。天
 之所授也。と見ゆ。此。太閤の本志を察すべし。然れど。此
 外の條。くゞも。は。甚く物あらぬ者。の。書。り。と。見。えて。更。不
 尊。内。卑。外。の。旨。ふ。叶。も。ぞ。却。て。皇。國。北。光。り。を。失。へ。る。事。ども
 多く。殊。小。西。行。長。ら。が。毒。佞。の。計。ひ。と。文。盲。の。人。北。み。多。き
 と。み。て。太。閤。の。本。旨。の。彼。國。不。達。せ。ざ。り。し。と。い。は。れ。く。口。惜
 き。事。あり。け。り。其。師。北。取。我。慨。言。ふ。具。論。ひ。置。れ。と。る。を
 見て。知。ゆ。し。猶。加。の。外。史。小。秀。吉。公。軍。を。朝鮮。に。発。し。給。ふ。時
 小。或。人。漢。文。を。善。ま。る。者。を。從。へ。給。ふ。と。申。ける。小。秀。吉。公。笑

て。彼。國。人。小。我。が。文。を。用。ひ。お。め。む。の。み。と。答。然。る。は。彼。韓。國
 牙。給。る。と。し。見。え。さ。る。を。も。思。ひ。合。さ。せ。ゆ。し。然。る。は。彼。韓。國
 戎。征。給。牙。候。を。甚。ま。き。大。皇。國。の。御。光。亦。候。を。世。よ。を。彼。此。小
 論。へ。依。者。も。有。と。し。あ。る。は。上。代。れ。大。御。手。風。を。し。得。あ。ら。ぬ
 癡。心。よ。あ。も。有。け。る。其。を。天下。の。諸。蕃。國。悉。く。我。が。皇。大。朝廷
 小。仕。牙。奉。る。法。き。道理。ある。を。秀。吉。公。は。る。由。縁。を。知。り。給。は
 ざ。り。お。ら。免。ぜ。自然。よ。上。代。れ。御。由。縁。よ。も。幽。契。て。い。や。有。難
 事。亦。加。し。此。公。の。朝廷。の。御。衰。廢。を。興。し。給。ひ。し。事。ハ。武
 家。高。名。記。よ。秀。吉。公。京。都。の。関。基。を。尋。給。ふ。條
 小。天。正。年。中。の。末。四。海。平。均。よ。治。り。し。う。ば。或。時。女。以。法。印。紹
 巴。を。召。て。洛。陽。を。遊。覽。有。る。小。東。を。高。倉。よ。り。北。七。鴨。川。の
 河。原。平。く。と。東。山。よ。取。続。き。耕作。の。地。あり。西。を。大。宮。よ。り。嵯
 峨。太。秦。へ。押。通。し。田。畠。ふ。り。南。北。北。際。何。と。も。あ。く。只。在。郷。の
 如。し。一。く。見。給。ひ。て。細。川。幽。齋。を。召。て。尋。ら。れ。ける。は。花。洛。と
 小。昔。よ。り。云。傳。へ。し。う。ど。此。有。さ。ま。い。在。郷。よ。等。し。洛。中。洛。外

とは何より云境ふし。其上内野の上北野右近の馬場
中云森の興ありて面白き所ふ。右近あらは左近も有べ
き事あり。何とあて無やらむ。今洛中洛外の堺を。末代の
よ定む。都の旧記を如何ぞや。幽齋畏て。桓武天皇延暦
三年十月二日。奈良京春日の里を。始て長岡里へ迂り給
ひて。同十年ふ。彌四神相應北地ありと。葛野郡愛宕郡へ
同十三年十一月廿一日。小迂都あり。油小路を中。小立て。條
理を割給ふ。東ハ京極まで。西ハ朱雀北ハ鴨口。南ハ九條ま
て。多九重の都と。油小路より東を左近。西を右近とし。右
京ハ長安。左京ハ洛陽と号給ふ。其より内裡代く。少々
替るとハ申せども。此定め置る。洛中洛外の際ハ。聊も違
ふ事あり。然る所。高氏公の末孫。法住院常德院の時代よ
り。何となく衰ふ。其謂を。内野御前山名奥州。謀反よ。歎
も。去れど。兵乱起りし。ハ。都鄙の貴人往來絶て。自ら零落
去と聞る。秀吉公。聞召され。左も右も有らめとて。事の始
終を能く思慮有て。まづ洛中洛外の土手を築せられ。禁殿
を磨き。王法の祭事廢れ。とるを興し。洛中の地子。公方役を
悉く赦免ありて。都を守護と給ひけり。と有る。よても。其大
方を辨。然れど。何ある。枉神の禍事。ふや。率られ給ひけむ。神

祇官の地を亡し。天下諸神社の領地を多く没収せられし
由あるは。最も忌々しく不審なき事ふこそ。此を参考神名
式の附録に説
を見て知。斯て後。東照神御祖命は。世を平穩に治
る。給し。末給ひ。其あろまでも。天下の大名とち。足利の世。北風不習
ひ。あふ朝廷を畏み奉る。は。き理を。忘れ果たる。如くありし
を。東照宮。そ。此御武徳を以て。天下北大名とち。悉く帥を
坐し。その御尾前と爲。天皇命。我御崇敬在しける。ふ宸
襟易く。天下の人民。始て安堵。ふぞ成れりける。其趣。ま。ま
也。ふ千日。北早。ふ。あ。み果。たる。草木の。慈雨を得。たる。如く
よぞ有。り。依。玉鉾百首。東照御神貴とし。天皇を。い。た。き。奉。
ら。御功績見れ。安御代と君の大御世を東

照る。神の命ぞ固め給へる。東照神の命北安國と。未だ坐
る。御世ハ萬代おと詠れり。倍み此哥ども。の如く。加
太平。御て。士農工商。その産業。安む。居こと。み。東照宮
の御恩。頼。資。おと。れ。を。を。朝。夕。み。その御神徳を。辱。み。拜。れ
し。奉。る。は。き。け。て。慶。長。二。十。年。七。月。不。時。の。關。白。二。條。昭。實。公
事。お。あ。そ。と。共。不。定。させ。給。へ。る。禁。中。諸。法。度。の。初。條。ふ。天。子。御。藝。能。之
事。第。一。御。學。問。也。不。學。則。不。明。古。道。而。能。政。致。太。平。者。未。之。有
也。云。く。所。載。禁。祕。抄。御。習。學。專。要。候。事。と。あ。り。ま。不。寬。平。遺。誠
觀。政。要。群。書。治。要。を。も。誦。習。ひ。給。ふ。べき。由。の。御。文。も。あ。り。ま
其。寬。平。御。遺。誠。も。毎。日。整。服。盥。嗽。拜。神。と。記。させ。給。へ。り。ま
は。最。も。有。が。と。き。御。文。お。り。其。由。を。是。ま。て。天。下。麻。の。如。く。亂
れて。朝。廷。の。御。衰。微。あ。り。し。事。は。中。世。よ。り。天。皇。命。と。ち。餘。り
ふ。佛。法。を。信。じ。坐。て。古。道。を。明。ら。く。給。を。交。神。世。北。御。由。緒。を

思し食さば。第一。御。務。め。有。は。き。神。事。を。鹿。略。ふ。遊。せ。る。よ
り。起。れ。る。事。を。勤。考。し。給。ひ。此。後。を。古。の。如。く。禁。中。の。作。法。ま
お。神。事。の。ち。ふ。他。事。と。る。は。く。其。御。心。得。ふ。を。禁。祕。御。抄。北。御
習。學。こ。そ。專。要。を。侍。れ。と。宣。り。御。文。あ。れ。ば。れ。り。已。命。を。禁
梁。の。任。ふ。當。り。給。へ。れ。ぬ。如。此。を。御。定。め。け。て。其。神。事。や。ぐ。て
坐。け。む。と。誠。に。宜。あ。る。御。事。お。あ。そ。け。て。其。神。事。や。ぐ。て
天。下。を。治。む。る。御。政。事。北。本。あ。る。故。ふ。古。例。の。如。く。天。皇。の。御
業。と。れ。し。參。らせ。四。夷。八。荒。を。鎮。免。世。を。治。む。る。御。勞。死。を。天
皇。代。り。坐。て。万。民。を。安。撫。し。給。ふ。御。事。お。り。の。久。し。き。故。ふ。
其。太。平。の。常。に。あ。れ。て。自。然。ふ。そ。の。御。恩。頼。を。然。し。も。有。難。き
事。と。思。え。ぬ。倫。も。有。め。れ。ど。其。才。足。利。時。代。あ。ど。の。乱。世。れ
し。有。状。を。淡。く。も。え。知。ら。ぬ。故。あ。り。玉。鉾。百。首。ふ。安。國。北。安。ら
け。き。世。に。生。れ。遇。て。安。け。く。て。有。れ。ぬ。物。思。ひ。も。れ。し。所。薦。の

○玉多須伎二之卷 ○五十六

乱まりしさま聞ときし。治れる。是よ正後也。御代く北天皇
 世を貴く有るなり。あど詠れと正。是よ正後也。御代く北天皇
 るち。能く神世の由緒を御守り遊むし。神事を專要と遊む
 さゆ事ふて。近代の年中御行事あどを拜見を必ふも。正
 月あどた。十五日ぐ布せ。御寝ある間もあき程の事よて。其
 御祈正事はし。唯く天下北人民の安然ふ在るやう。五穀の
 豊饒は在るやうふとの。御禱よ正他事あし。然るふかく豊
 米の價ひ易く。難儀ありと云ふ者も。有る由あるは。能
 くも神祇の御罰あき事せ。そら恐ろしくぞ所思ある。はて
 東照宮より。將軍家北御代く。無窮ふ天皇の御手代と志て。
 江戸北御城ふ坐おく。諸蕃國を鎮めて。天下を治め。萬民を
 撫育し給ふあとは。畏けきと神世ふ。天照大御神皇産靈大

神の青人草を愛しみ給ひ。其を治め給えむ爲ま。皇孫邇ニ
 藝命哉天降し給ひし大御惠多。天皇ふ代正て。將軍家北あ
 し行ひ給ふ道理あるが。はと國く所くを。持分け領らに侯
 等也。その御手代と志て。預め治むる道理あぞ有るは。是を
 玉銚百首ふ。天照を神の御民ぞ御民らま。おわろふもれ
 預れる人皇神のえぐ。思ふも人草ぞ。世中北人悪くま。あ
 也。あどぞ詠れらる。其も玉が。おま。朝野群載ある。新任
 國司。應宣ふ。恒例。神事。守式。日。殊。可。勤。行。矣。とも。國中。之。政
 神事。爲。先。專。致。如。在。之。嚴。莫。須。期。部。内。之。豊。稔。云。く。と。有。る。を
 擧て。古。を。諸。國。よ。て。も。神。事。を。重。く。せ。ら。れ。し。事。か。く。の。如。し。を
 と云ひ。更。科。日。記。も。菅。原。孝。標。の。東。國。の。國。司。ふ。あ。り。て。下。記
 志。り。國內。の。神。社。め。ぐ。め。せ。る。事。を。擧。て。昔。を。國。司。任。國。ふ。下
 め。て。ハ。ま。づ。部。内。の。神。社。く。ふ。詣。て。し。事。あ。り。と。言。れ。は。と
 天。の。下。北。政。神。事。を。先。と。せ。ら。れ。し。事。と。も。を。擧。て。万。の。事。は
 だ。り。め。唐。の。國。ふ。り。を。習。ひ。給。り。め。し。御。世。ふ。し。も。然。有。り。け。る
 は。然。ま。が。ふ。神。の。御。國。北。あ。る。し。ふ。て。最。も。く。尊。く。め。て。と

○玉多須伎二之集
 (五十七)

た態カタもあむ有アける世中ヨハ何ナニもあけても此コノ心ココロむへあそ有アま欲ホシけれとも言イハれしを思オモひ通トして心得ココロべし今イマの諸シヨ侯コウと
否イナを知らシ然シカれども古コノ道ミチふ志ココロさむ徒タを殊シよく此コノ漢カン理リ
を辨シりて其ソノ時トキは御ミコト制度シヨを常トキトキ忘れぬ畏オソみ尊ウツクシ奉ホウし奉ホウる儀ノリ
き事コトふあそ先サキ師シの歌ウタも加カも加カくも時トキの御ミコト令ノリふ背セうぬぞ
神カミの眞マコト北キタ道ミチふハ有アる時トキの御ミコト法ホウも神カミ北キタ時トキの御ミコト命ノリふ
志ココロ有アれども以モうて違チガふと詠ウタれしは此コノ事コトなりマコト今イマの御ミコトのり
を畏オソみて異イしき行ユキひ行ユキふあゆと詠ウタれき天テン下カく太タイ
平ヘイよて五イ穀コクも豊トヨ饒ニウあるよと全ケンく神カミ事コトを第ダイ一イチは遊ユウむを朝チウ
廷テイの御ミコト勤チンめと東トウ照シウ宮キウの世ヨを思オモ召メカされし御ミコト心ココロと相サ合カひて
神カミ世ヨ北キタ道ミチ理リふ符フひ皇スミ神カミとち北キタ人ヒト草クサを恵メみまは神カミ慮リふ叶ツ
ひ給タマふ故コトありちて東トウ照シウ宮キウの志ココロ御ミコト定サめ坐マせ儀ノリ事コトハ去クて皇スミ
朝チウの古コノ典テンふ本ホンおき給タマふ儀ノリふて古コノ道ミチの學ガク問モンを此コノ御ミコト神カミよて

ぞ始ハジまりける其ノ駿府政事録ノ慶長十六年ハリ二十年六月リクまでの所トコロを能スく読ヨミみ右ミダの諸シヨ法ホウ度トの二
十年七月の御ミコト文フミあるハ然シカるは保元平治の頃トキ北キタ亂ランより世ヨ中
ハ相サ發ハツあて辨シふべし然ルハ保元平治ノ頃北亂ヨリ世中
うち續ツき喧ケン擾ヤウし有アし事コトをおきて足利氏アジノウヂは天下テンカの事コト執シら
れし世ヨは天下テンカ一年イチネンも事コト無ナシし年トシあく殊シハ應仁の大
亂ランよて諸國シヨクニクは軍イクサ起オキりて京都キョトもをりく兵火ヘイカは燒ヤクきて古
書フミども多くは燒ヤク失シせ稀ヒく遺ユイさるも漢カンく祕藏ヒソカして世ヨ中
出デ去クあつと無ナシれぬ見ミる人ヒトあく世ヨ中ナカは苜蔣モウシヤウの如ゴトシく亂ランがえし
有アり哉ナニ織田信長公オリタノブナガノキミ豊臣秀吉公トヨデノヒデキミおぎくハ征伐テイバツめ鎮チン免ケン給タマ
ひあつども諸國シヨクニクの守カミとちあつ足利の代ヨ北キタ舊フルき風フウハ慣ナラひ
て動ユル去クれぬ荒アラび立タツたき狀サマありしを東照宮トウシウノミヤ漢カンく神慮カミノリを經シ

ら志坐て。天下を一統を給ひ。宸襟を休め奉り。民を安撫む
給ひけり。其を元和元年の事あるが。是より先慶長の末
扱方よめ。普く天下ふ令せて。古書の秘れざるを召問ひ。古
道を順考子給へり。古事記。六國史。今式格律。北御典を始
め。古語拾遺も。此時ふぞ再び世に現れり。然るハ駿府
六年の処。九月十六日吉田。神龍院梵僧進藤原系圖一卷。
十九日。今日建武式目。令林道春。誦之。議論其得失。給十月朔
日。舟橋式部。少補秀賢。自京都着府。献諸家累系圖。六日。召画
工狩野大内。因并日本大社。因新造之前殿。可画之。由被仰出
則画工与舟橋可相談云。十一月十八日。鎌倉。莊嚴院出仕
依御尋而。鎌倉。三代將軍。北條九代。旧規之事。詳言上之。保曆
間。記所持之由。申之。自保元至。曆應治。乱粗所記云。則其書
可有御覽之旨。被仰。ま。十七年の下。伊豆山。般若院。快運。献
東鑑。盛衰記。異同。令考之。給。三月十日。伊豆山。般若院。快運。献
續日本紀。令道春。誦之。は。十九年の下。四月五日。群書治

要。貞觀政要。統日本紀。延喜式。自御前出。五山。衆。可令。拔。書。公
家。武家。可。為。法。度。之。処。之。旨。被。仰。出。金地院。崇傳。道春。承。之。十
三日。今日。群書治要。統日本紀。延喜式。等之。拔。書。進。上。于。御前。
金地院。道春。於。御前。誦。之。二十日。仰。曰。公家中。法式。為。記。定。諸
公家。之。記。錄。皆。書。寫。可。有。之。旨。被。仰。三代。實錄。西三條。所。持。之
由。六月。二日。今日。卷。本。之。統。日本紀。不足。所。十。卷。此。内。仰。五山。
衆。令。書。寫。統。給。捧。御前。八月。十九日。律。令。到。來。是。者。金澤。文庫
之本。關。白。秀。次。執。之。今。出。川。殿。被。遣。之。今日。被。進。之。令。三十。篇
内。十。篇。不。足。律。二。卷。有。之。九月。七日。今日。舟橋。秀。賢。依。死。去。繼
目。之。爲。御。禮。舟。橋。大。炊。介。參。著。秀。賢。男。也。爲。遺。物。三代。實。錄。献
之。内。十。卷。不。足。云。く。十月。二十。七日。今日。五山。衆。五十。人。於。南
禪。寺。金地院。諸。家。記。錄。一。本。三。部。宛。令。寫。一。部。禁。中。一。部。江。戶。
一。部。駿。府。可。令。置。給。由。傳。長。老。道。春。奉。之。十一月。六日。今日。吉
田。神。龍。院。諸。家。系。圖。七。冊。進。上。之。九日。南。光。坊。傳。長。老。召。與。御
座。間。御。雜。談。今。度。諸。家。記。錄。就。御。寫。日本。後。紀。弘。仁。貞。觀。格。式。
類。聚。三。代。格。等。仙。洞。有。之。乎。否。以。南。光。坊。被。仰。遣。記。錄。書。立。則
傳。長。老。道。春。奉。之。南。光。坊。參。被。奏。外。御。所。持。之。本。可。被。書。寫。之
旨。云。く。十月。今日。從。仙。洞。類。聚。三。代。格。六。卷。自。聖。武。後。一。條。院
迄。年。代。畧。十。九。卷。類。聚。國。史。二。卷。古。語。拾。遺。等。南。光。坊。爲。院。使
持。參。及。夜。道。春。於。御。前。誦。之。云。く。十二月。二十。三日。傳。長。老。唯

心院出御前仰曰今度諸記録書寫然則自公家古今禮義式
法之相違可被申上旨先日相觸処無其注進之由被仰云
二十六日傳長老出御前今度被仰付記録等之内旧事本紀
古事記統日本紀文德實錄三代實錄江家次第明月記統文
粹菅家文集西宮記釋日本紀内裡式山槐記類聚三代格等
献之二十七日於長橋局對諸公家有被仰事禁中禮法儀式
等二十九日廣橋大納言三條大納言御對面捧日録七箇條
正月節會事白馬節會踏歌事准后親王位階事官位以下云
云仰云是無其古今異同之分考律令格式自駿府可被仰越
之由被仰出まゝ二十年の下ふ六月九日今日傳長老持本
朝文粹兩部備御覽件本者自甲州身延到來仍先日仰五山
僧令書寫給処也第一卷不足之処道春於京都探出之備御
覽仍急可寫補由被仰出此一巻出來奇特之旨頗有御感云
云れど見えまゝ神道を御守崇めて御傳受あらせられ
る由も此記よ見えさゆ此等の事ども既く水戸人丸山氏
の成憲摘要も駿府政事録創業記御年譜徳川記家忠日
記を始め種々の書を引きて記著し中古より朝廷衰了て
文學禮典廢れ菅江の博士も只名のみ存り詩賦文章ハ五
山僧家の翫物とれ況て書を讀む人ハ希ありけるを東
照宮禮典文學を嗜み給ひ金地院足利の三要日野唯心院

林道春おど日夜御前も伺候られぬ儒釋の奥儀も通達し
給ひう於神道を崇敬し給ひ和漢の書籍を尊奉求めさせ
給ひて諸家の記録も新し書寫を命ぜられ慶長十九年の
頃専ら大坂騷乱の時節ある小京都も御逗留の内よ加
く御心を盛用されたるあと眞よ文武兼備とる御事小や今
天下文物盛よ行われて人々學問も志ざもこと皆東照宮
の教化よよる所ありと云然れむおの御國學を畏くも東
牙るハ信お然る言あり
照宮の始を興し給子承おゆけ也
御今かく平けく安んじ大
書等も容易く見得らるる當昔古書をえうじ給へる趣
を見通して常小此神の恩頼ある事を思ひ奉るべき事小
お斯て御遺命ありて駿府小御藏め有るる和漢の書等を
公子さち小御分配ありしよ御國書をば多く尾張の源敬
公子賜ひ漢土籍をば多く紀伊の南龍君小賜りしうば
敬公その御心を承給ひて御國北學問を興し給ひ古道を

明して。神祇寶典類聚日本紀おど御撰み有る後。御孫
水戸中納言光圀卿皇道の乖雜を歎き給ひて。禮儀類典神
道集成大日本史おど種々此御書を記させ給ひき。此尾張の殿
人天野信景ガおほりといふ記。また成憲摘要おど記
せるを摘採りて記せり。おほ塩尻小記。南龍公文雅の如
お末し。水戸源威公御作文めでとく坐しけるハ頼朝卿の
御子尊氏公の令君おどかふるおえしや。おほ況て織田
豊臣をや。とも云り。○或人云。今寫本小て傳ハる二十卷の
日本後紀。お真本の日本後紀の傳むらざる事を惜みて。教
公の神祇寶典を撰むせ給ふ頃。おかの御内人の纂成せる
ぬりと云り。彼後紀此事実の正きを思ふは。信不然らむ
も。知れうら。此。ちて東照宮上件の如く。古書を召問ひ
猶よく尋ね給ひ。給ふる事は。古道ふ順考。故實を正して。天下奏し給む
の御心ありし事。當昔の記等お見えたる如く。ふて。聊も古

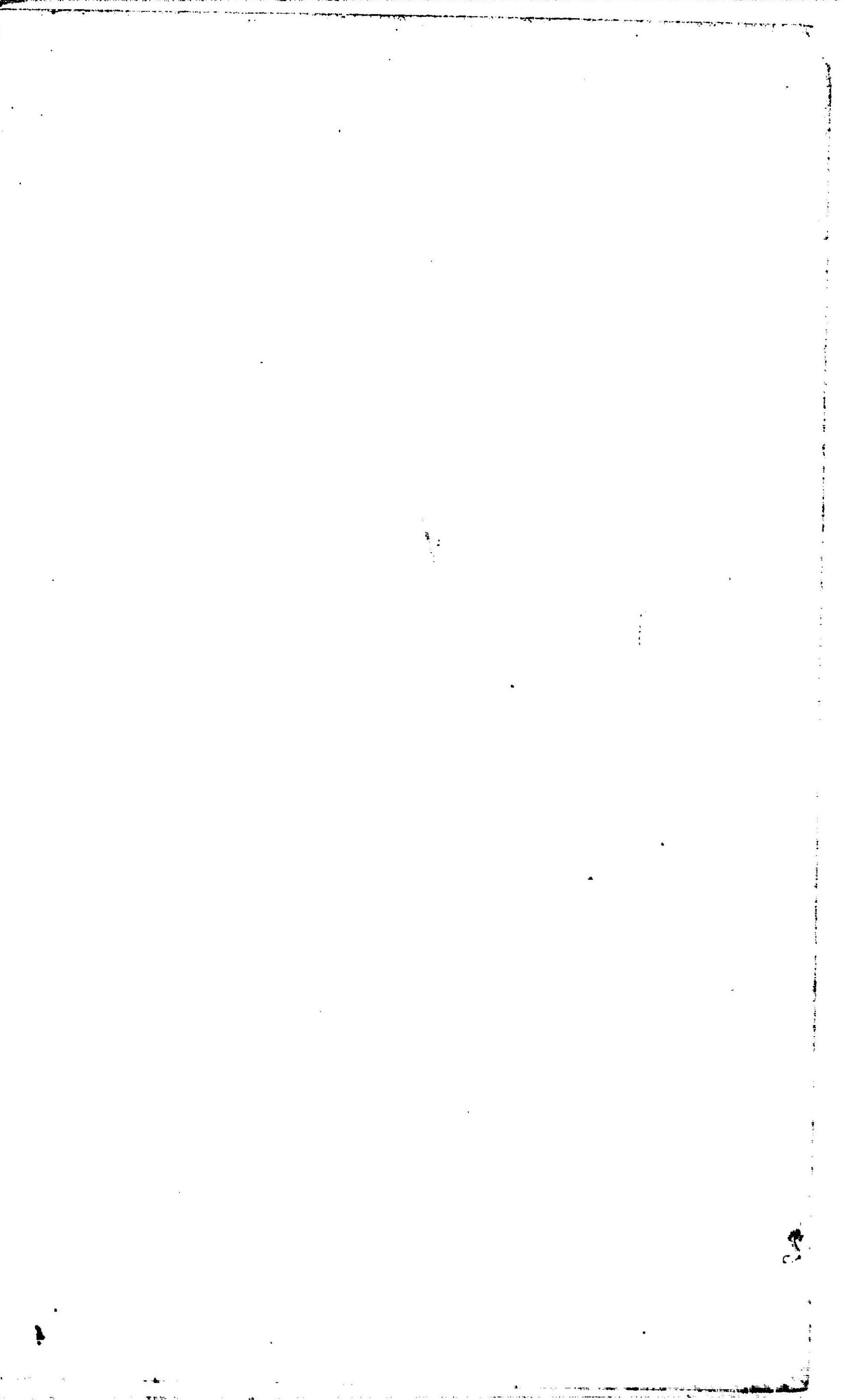
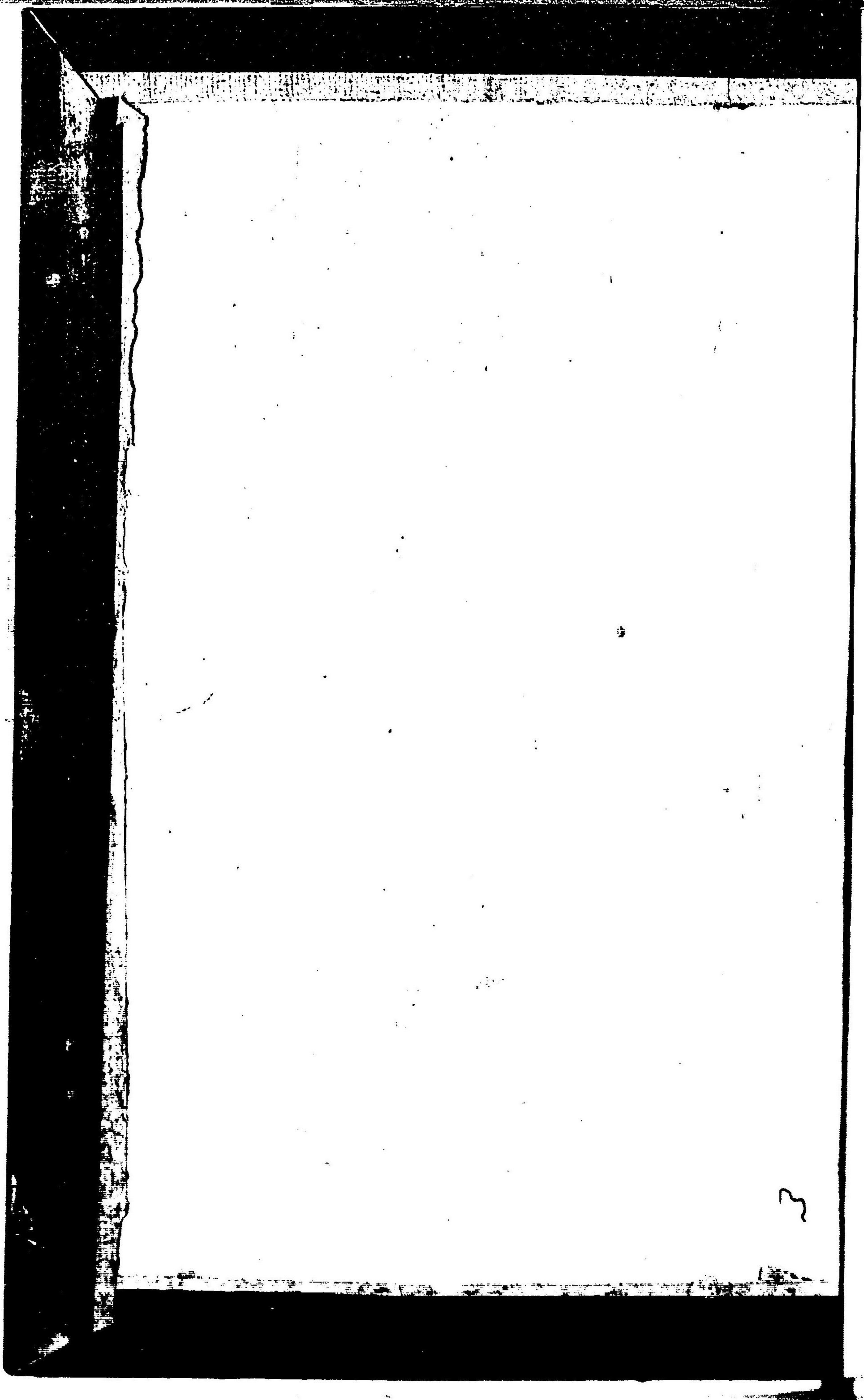
物珍奇し。み。翫弄び給むと。ふハ非ざりけ。記。其。駿府
二十年六月二十三日の処。今日陸奥守正宗持参定家自
筆。古今集並俊成女自筆。古今集被備御覽。則召冷泉。爲滿令
見給。政宗以日野唯心院言上申云。於入御意者。致進上度。由
再往雖申之。可爲正宗翫弄之慰。由被仰令返之。給云。くとあ
るを思ふ。此頃古書を訪求め給ふ。脚ありし。くは。正宗
卿の心よ古物を好ませ給ふと思ひて。進上らむと申され
ふ。林道春先生時の儒宗を志て。常お御前ふ侍をれ。る
が。御國北古を考ふる事を。專要と勤まれ。る事。その著さ
れ。る書等。字見て。知。は。く。是。や。が。て。東照宮の御心あり。林
い。今。至。迄。まで。此。風。お。て。國。學。を。第。一。と。し。せ。ら。る。由。れ。り。
其。お。近。ご。ろ。今。此。祭。酒。の。場。保。己。一。檢。校。お。命。せ。ら。れ。し。言。ふ。
吾。家。の。學。お。於。て。ハ。國。學。を。第。一。と。し。は。て。漢。學。を。爲。お。と。定。
れる。法。お。る。ふ。門。下。の。徒。漢。籍。を。の。み。読。て。此。國。の。古。書。を。読。
ざ。依。お。備。め。り。漢。籍。此。み。読。む。者。お。唯。口。利。く。物。言。ひ。て。有。
用の。學。お。至。ら。び。故。お。の。國。北。古。書。を。読。し。め。む。と。思。へ。ど。多

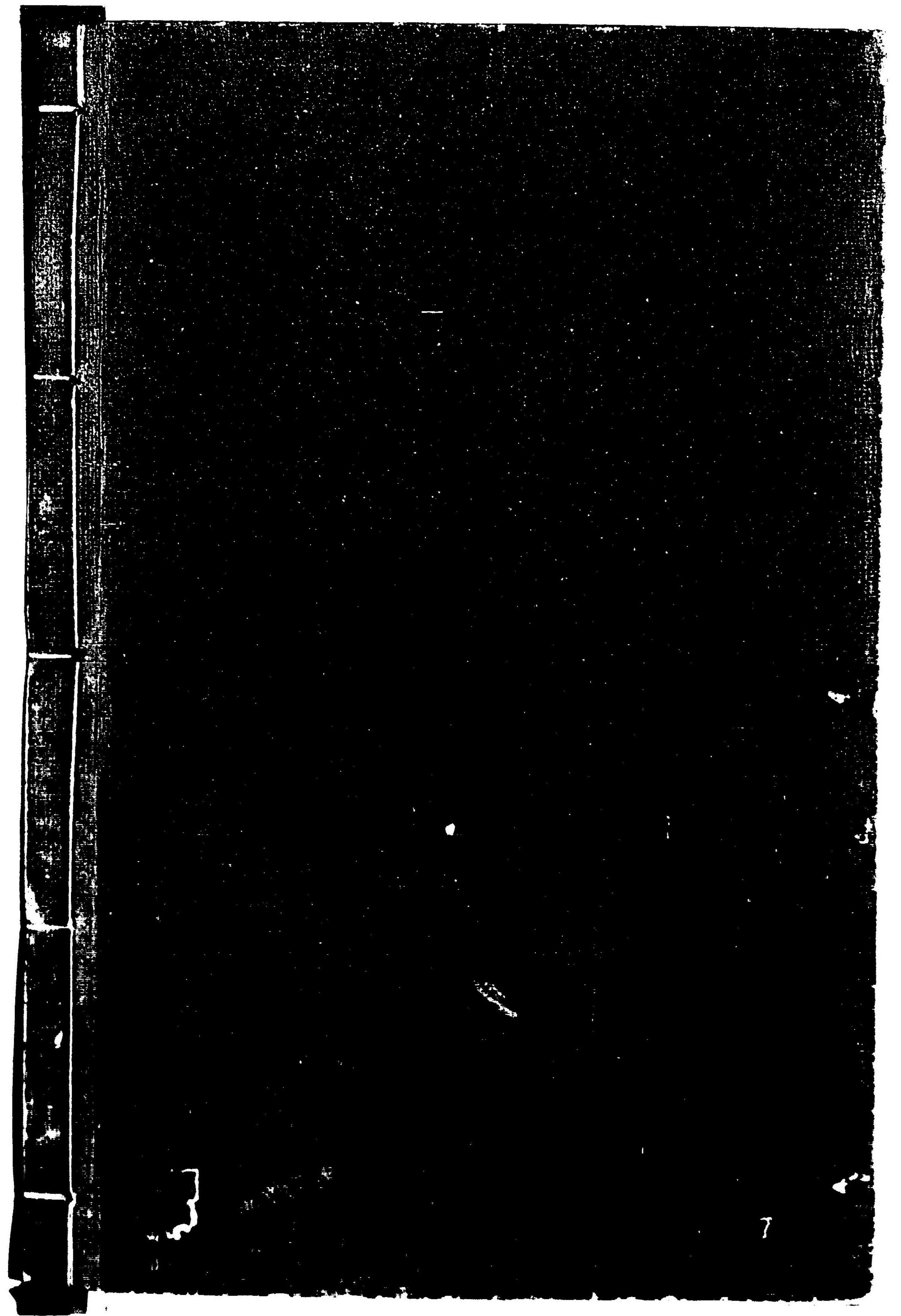
くハ寫本お版子板本といへども誤字多々れぞ日本紀よ
り始めて次くお美しき彫本も直してよと公儀の命を合
みて任られしと堀氏の語られきいと難有きよとれ
巴漢學のみを草ハよく此旨を思ふべき事おおそ抑東
照宮ふ公子お布く御坐しける中ふ彼草薙の御劔座
まに尾張國を封し賜へる敬公ふしも御國書を賜ひて古
學を興はしめ給子依事と幽契ある事のおと思を成は
何ふ有らむ。畏けれどあう思ひ合さぬ事由少う言
宮子鎮まりいほと詠れし如く日本武男命か荒振る
神ども東夷どもを言向け坐て後子御劔ハ命か熱田
り坐せるは元より齒契ある事お依ふかの取我言よ信
長公秀吉公追次ひて同じ尾張國より出給ひて皇朝を崇
まへ尊み奉りて天下を拂ひ鎮め給ひ朝鮮の國をも征け
給子御威ひお万の國く彼鎮もろこしの朝國を震ひ御
の御徳は専ら彼尾張國お鎮り坐るは突然事おて其道

理やぐて古道の學問の神ふ君子國お忠ある事の大義を
説明して天下に弘おれ此正道北意の徑を拂ひ清め俗北邪説
を言向けて遂おハ此正道北意の諸蕃の國くまてよ教
牙及不其王等おぞりて皇朝の御威威を畏み仕奉るべ
き事の趣およく叶牙扱ま光圀卿を寶とある種く書
れぞあり穴かしこと
ども撰ひ坐て大ふ古學を興し給子依事と
年山集おど其外の世了も弘ほり志ある人く京ふも鄙小
書等おも見えさり
も起りける中ふ京ふ荷田大人出られ吾古學の規範たる
旨を上書し給ひ次ふ遠江國よ巴岡部大人出られ田安殿
お召れて此學を申され。田安殿の撰び給へる古事記詳説
服色漫語といふ書をも往し年見さるおいと珍しく書さ
給子りま今今の論曲の大抵ハ佛法風よて大皇國の風お
非ざるを慨み坐て別お撰まお給へ
る獨吟曲と号けられる物もあり
其門よめ吾師本居

大人伊勢國小興也。此學ふよりて。紀伊殿ふ召れき。此二人の翁とちほ。大きよ古實を説明されしよ也。鄙も都も古學此尊き事を知て。今かく眞盛と成ぬき時ふ逢ひて。吾輩ふ至るまで母安ん死御世の徳化ふ手伸みおく。古道を伺ひて。斯はうりも。物記去事と成ぬる哉。彼廣成宿禰の神靈の天翔り見て。千載の後ふ。其志此達れる事を。深く歡び。此ふ始めて畜とてし憤を據ひて。東照宮の御功績を辱み。斯く仕へ奉る吾が輩此學問をも。珍重とれも守ざらえや。甚愛とれも幸ふざらえや。

文政元戊寅年八月





837
10
86

THE
MUSEUM
OF
THE
CITY OF
NEW YORK
AND
THE
HERRICK
MUSEUM

曹山文庫